
シークレットナイトライド2 〈再編版〉

西村真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレットナイトライド2 〈再編版〉

【Nコード】

N7710Y

【作者名】

西村真琴

【あらすじ】

三流評価装置メーカーに勤める神崎龍人は半導体の解析技術者だ。実は彼は大学を首席で卒業した天才である。神崎は自分から三流会社を希望して入社したのだ。学士の道を選ばず企業人としての成功を目指す神崎は日々研究評価に明け暮れる毎日だった。

ある日、神崎はナノテクノロジーの最先端技術で作られたブラックウエハの解析を依頼された。神崎はウエハの解析に成功するのだが解析データを謎の人物に狙われることとなった。神崎の上司、

同僚、知人がこの事件に巻き込まれ危機が迫った。

しかし、間一髪のところではブラックウエハが起動してマイクロ波を放ったおかげで危機を切り抜けた。そして今年4月、事件で出会った高校生の相川真理が神崎の会社に入社してきた。

第一章 解析依頼書（前書き）

2作目に書いた短編版シークレットナイトライド2を連載小説版に再編します。

短編版のシークレットナイトライド2は、しばらくの間そのままにしますが、時を見て消しますのでよろしくお願い致します。

第一章 解析依頼書

神崎龍人はモニターに映し出された解析データをぼんやりと眺めていた。

このところ残業が続いて神崎は少々お疲れモードになっていた。

「神崎さん、宅配が届いてます」

神崎はパソコンから目を離すと解析技術課管理係の相川真理から封筒を受け取った。

「神崎さん！ 顔に疲れたーって書いてますよ！」

「えっ？」

「たまには息抜きしないとダメなんじゃないですか？」

相川は後ろに手を組んで神崎の顔を見上げた。

「ああ、そうだな、このところメーカーのクレーム処理ばかりで疲れるよ」

「そうでしょう！ たまには行きますか？」

「えっ、どこへ？」

「私とデート！」

神崎は椅子から落ちそうになった。

「ハハハ・・・」

神崎は笑ってごまかした。

「こら！ お嬢！ また神崎さんの邪魔してるわね！」

相川が後ろを振り向くと先輩の田町由香里が腰に手を当てて立っていた。

「あっ！ 田町先輩！ ヤバイ！」

「早く席にお戻り！」

「ハイ！」

相川は舌を少し出すと自分の席に戻っていった。

「本当に！ 油断も隙も無いっスね！」

そう言う田町は神崎と目を合わせて笑った。

相川真理は今年入社の高卒新入社員で18才の美人社員だ。神崎の大学時代の恩師相川教授の娘でもある。彼女は今年4月に新光技術工業社に入社し神崎と同じ解析技術課

に配属された。

田町由香里は同じ解析技術課管理係で相川真理より1年先輩である。田町は短大卒なので21才だ。彼女もまた美人社員であるが男兄弟で育ったらしく性格が男っぽい。

「神崎さん、ほんとにちよっとお疲れモードっスね！」

「たまには行きますか！ グイっと！」

そう言う田町はコップを持つ仕草をした。

「そうだなグイっとか」

「そっスよ、仕事ばかりしてたらオヤジになるっスよ！」

「よし、それじゃあ田町、今日はノー残業デーにするか」

「神崎さん！ いいっスね！」

「ああ！ 田町先輩！ ずるい！」

相川が後ろから覗き込んだ。

「あら、お譲、聞いてたの？」

「聞いてましたよ！ 先輩！ 私も行きますからね！」

「だめ、だめ、子供はだめよ」

「先輩、私大人ですからね！ ほら！ 胸だって田町先輩に勝つてますから！」

そう言うのと相川は神崎の前で自分の胸を強調して見せた。

「何言ってるのよ！ 私も結構なものよ！」

田町も神崎の前で自分の胸を強調して見せた。

二人の胸に挟まれて神崎は視線のやりばを失ってしまった。

神崎は相川の胸を見て次に田町の胸を見た。

「引き分けかな？」

神崎がそう言うのと二人が同時に声を上げた。

「神崎さん！ セクハラです！」

神崎はまた椅子から落ちそうになった。

「はぁ・・・」

夕方、神崎は早めに業務報告をノートにまとめていた。

「えっと、本日はカップー接合評価とペースト材の濡れ性評価」

神崎は小さな声でつぶやきながらボールペンでノートに記入した。

ふと机の上を見ると朝に相川から受け取った宅配の封筒が目に入った。

「あれっ、これ忘れてたな、何だっけ？」

神崎は封筒を見回して発送元を確認したが封書には何も書かれていなかった。

封筒をはさみで切って開封すると神崎は中身を確認めた。中から板チョコみたいなものA4用紙が出てきた。

神崎はA4用紙の内容を確認した。

「えっ！ これは！ 解析依頼書だ！」

神崎は驚いた。

何で俺に直接届くんだ？ 依頼元は・・・えっ？ 何？ キャパシティブレイス？ C M D 社か？ C M D 社と言えば強誘電

体メモリーの超一流メーカーじゃないか！

なんでそんな一流メーカーが解析依頼を個人宛に出してくるんだ？

神崎は解析依頼書の依頼元をもう一度確かめた。

間違いないC M D社だ。

神崎は解析依頼の内容を確認した。

依頼書にはチップの構造解析依頼と書かれてあった。

神崎は板チョコみたいなのを手に取り上げると蛍光灯で透かして見た。中は見えなかった。

これが評価サンプルなんだろうか？ 半導体の評価サンプルをこんな袋に入れて送るなんて？ 相手はド素人か？ しかも、この宅配は一般便だし精密機器取り扱い注意の

シールさえ貼られていない。何か変だな。

この評価依頼に神崎は疑問を抱いた。

依頼書には評価内容は書かれてあるが日時の指定や期限が一切記載されていなかった。ただし、連絡先と依頼者名は記載されていた。依頼者は真田雅人と書いてある。

「これ、本物かな？」

神崎はポケットからPHSを取出すと依頼書に書かれた連絡先に

外線接続で電話をかけた。

「プププ・・・プププ・・・はいキャパシテイメモリデバイス開発プロジェクトチームです」

「あつ、もしもし、CMD社様でございますか」

「はいそうですか」

「新光技術工業社の神崎と申しますが真田雅人様はおられますでしょうか」

「真田チームリーダーですか？ 少々お待ちください」

電話の保留ボタンが押されてメロディが鳴った。しばらくして電話が繋がった。

「神崎様、申し訳ございません、真田は本日シンガポールに出張中でして明日帰国致します」

「こちらから改めて連絡致しましょうか？」

「ああ、いえ、またこちらから電話させて頂けます」

「そうですか申し訳ございません」

「ありがとうございます」

開発プロジェクトのチームリーダー？ 一流企業だから部長クラスだな？ 本当にこの男がこれを依頼して来たんだろうか？

神崎は板チョコみたいな評価サンプルをもう一度手に取り上げると考えこんだ。

とりあえずこのサンプルを開いてみようか？

神崎は田町に声をかけた。

「田町！ 俺ちょっと評価室に入ってくるよ！」

「えっ？ 神崎さん！ もうすぐ終業時間っスよ！」

「すまん、ちょっとだけな」

そう言うのと神崎は評価室に向かった。

神崎は急いでクリーンウェアに着替えると手洗いをしてからゴム手袋をはめた。鏡で身形を整えるとエアークシャワーを通り抜けてクリーンルームに入った。

「よし、サンプルの開封だ」

神崎はカッターでサンプルの封を切ってみた。中を覗くとさらにアルミパックが入っていた。

「あれっ？ 防湿梱包か？」

そう言うのとアルミパックをさらにカッターで切った。プシュッと音がしてサンプルの封が破れた。

「この梱包は・・・素人でもなさそうだな？」

神崎はアルミパックの中からサンプルを取り出した。

サンプルは更に黒い帯電防止ケースに入れられていた。帯電防止ケースの蓋を開けて見ると中には銀色に光るICチップが入っていた。

「CSPか？」

※CSPとはチップサイズパッケージの名称

そう言うのと神崎は銀色に光るICチップをしばらく眺めた。

チップの表面には品種名と製造ロット番号がレーザーマークで刻印されてあった。

神崎はアースバンドを手首にはめると静電気拡散性の真空ピンセットでCSPを吸い上げた。

チップの裏面を見た神崎は驚いた。

「おい、おい、おい、勘弁してくれよ！　また真っ黒だぞ！」

「今度はブラックチップか・・・？」

そのICの裏面は真っ黒な炭素皮膜で覆われていた。

「見なかったことにしようかな・・・と言ってもなあ・・・もう手遅れか？」

神崎はサンプルをケースに戻すと蓋を閉じた。

「とりあえず保管しておくか・・・はあ・・・いやなもの見ちまったなあ」

技術事務所に戻った神崎は椅子に座ると机の上を片付け始めた。その時、神崎のPHSに着信が入った。

神崎はポケットからPHSを取り出すとPHSのモニターを確認した。

「あれっ、田町じゃん」

後ろを振り返ると田町が事務所の固定電話から神崎に電話していた。

神崎はPHSのボタンを押すと田町の顔を見ながらPHSで話かけた。

「何だい？」

「神崎さん、外線電話が入ってます、PHSに転送していいっすか」
「わかった、いいよ、転送してくれ」

田町はそう言うとう電話の保留ボタンを解除して固定電話の受話器を置いた。

「はい、もしもし、解析技術課神崎です」

「神崎か？ 真田や」

「えっ？ 真田様・・・もしかしてCMD社の真田様ですか？」

「そや、CMDの真田や」

ん？ 初対面にしては随分と馴れ慣れしいやつだな。

神崎は心の中でそう思った。

「神崎、俺や俺」

「俺って？」

俺俺詐欺か？ 変なやつだなあ。

「思い出せへんか．．．そりゃそやわなあ．．．7年ぶりやからなあ」

「はあ？」

「半導体研究サークルの真田と言うたら思い出すやろ」

半導体研究サークル．．．真田．．．真田雅人．．．

「あっ！もしかして真田先輩ですか？」

「そや、神崎、思い出してくれたか？」

「えっ！本当ですか？」

「ハハハ、ほんまやがな、本人が言うとなねんさかい」

「マジですか？」

神崎は思い出した。

神崎は大学時代に有志で作った半導体研究サークルに入っていた。真田はその研究サークルの先輩だった。彼は大学で半導体組立法の研究をしていた。特に接合技術の天

才だ、当時、大学では接合の真田と呼ばれていた。神崎は彼から接合の技術をよく教えてもらったものだった。

「ところで神崎、サンプル見てくれたか？」

「ええ、外観を確認したところですよ、CSPですね」

「そや、超スペシヤルなCSPや、チップは100層構造で特殊バンプ接合や」

※バンプ接合とはICチップの金属電極に金属ボールを形成し電極接合する技術のこと。

「えっ？ 100層！ あれ1チップじゃないんですか？ マルチチップですか？」

「凄いやろ、この技術はよそのメーカーには絶対真似出来ん技術や、まあ真田オリジナルやなあ」

「真田先輩、何故そんな凄いICを俺に直接送ったんですか？」

「そや、そこや、神崎、うちの会社は一流企業やけどな、お前みたいな味のある天才がおらんね」

「はあ・・・」

「明日の朝、シンガポールから日本へ帰国するさかい、正式にお前の会社に依頼を出すわ、頼むで」

「あの・・・真田先輩・・・もしもし」

プププと音がして電話が切れた。

「まいったなあ・・・」

真田先輩と言えば大学時代の大先輩だ。大先輩からの特別依頼か・・・しかし、あのチップはちょっと危険な予感がするな。俺には厄病神でもついているのか？

終業のチャイムが鳴ると定時帰宅の社員が持ち場を片づけ始めた。

神崎もとりのええず机の上を片づけるとPCの電源を切った。

「神崎さん、私たち社門の前で待ってますね」

後ろから相川が声をかけた。

「ああ、俺もすぐにいくよ」

神崎は相川に手を上げた。

神崎は椅子から立ち上がると両手を上げて伸びをした。

「さて、着替えるとするか」

神崎が居室のドアを開こうとした時、後ろから声がした。

「神崎君」

神崎が振り返ると中村技術課長が立っていた。

「本日の業務は終了かい」

「ええ、ちよつと息抜きに行こうかと思ひまして」

「少しだけ待ってくれないか、紹介したい男がいてね」

「はあ？」

「まあいいから、少し待ってろ」

中村課長はそう言うのと隣の居室に入ってしまった。しばらくして中村課長が一人の社員を連れて部屋に戻ってきた。

「紹介するよ、上海新光技術工業有限公司の石川君だ」

「あれっ、石川じゃないか」

「お久しぶりです神崎先輩」

「なんだ、神崎は石川君を知っているのか？」

「ええ、彼とは同期入社なんですよ、新入社員研修で1年間一緒にした」

「ああ、そうだったのか、同期入社か・・・でも歳が違うよな？」

「石川君は高専卒ですから私より2歳年下なんですよ」

「ああ、そういうことか」

中村課長は手元から書類を取出すと神崎に渡した。

「何ですか？」

「まあ、自分で確認しろ」

神崎は書類を受取ると内容を確認した。

「あっ！ これは！」

その書類は人事通知だった。

「神崎君おめでとう、君は5月1日付けで主任技師に昇格だ」

中村課長は嬉しそうに神崎の顔を見た。

「それは内示だ、近日中に辞令がおりるだろう」

「課長、ありがとうございます」

「礼はいいさ、お前の仕事の実績が認められたのさ」

神崎は中村課長に頭を下げた。

「神崎、おまえは主任技師になるんだから部下を持つことになるぞ」

「はぁ・・・部下ですか？」

「詳しくは後日報告するが君の部下は3名の予定だ」
「3名？」

「そのうち2名はすでに決まっているんだ」

「誰ですか？」

「ここにいる石川君と相川君だ」

「えっ、石川君が私の部下になるんですか？ 真理ちゃんも？」

「そうだ、5月から正式に君の部下になるからな」
「神崎主任よろしくお願いします」

石川が神崎に頭を下げた。

「いや、石川君、こちらこそよろしく頼むよ」

神崎は石川よりも深く頭を下げた。

神崎がセキュリティカードをかざして社門を出ると、田町と相川が門の前で待っていた。

「ごめん、ごめん、お待たせ」

「神崎さん、遅かったっスね」

「ああ、ちょっと中村課長に捕まっちゃってね、遅れついでもうちょっと待ってくれない？」

「えっ、課長も来るとか？」

「いや、課長は来ないんだけどね、もう一人来るんだ」
「誰っスか？」

「石川君」

「えっ？ 誰？ 石川君？」

田町と相川は顔を見合わせた。

「あっ、来た、彼が石川君さ」

神崎はそう言うのと石川を指差した。

石川は会社の保安所に臨時のセキュリティカードを返却すると社門から出てきた。

「神崎さん、お待たせしました」

石川は神崎に挨拶すると田町と相川にも頭を下げた。

「紹介するよ、同僚の田町と相川だ」

神崎は手を上げて田町と相川を紹介した。田町と相川も石川に頭を下げた。

「神崎さん、二人とも凄い美人ですね！」

「ハハハ、石川君お世辞がうまいね！」

「お世辞じゃないですよマジですよ！」

石川は神崎に小さく手を振った。

第一章 解析依頼書（後書き）

前作シークレットナイトライドの続編です。

よろしく願います。

ああ、またやってしまいました、投稿してから完成まで半年もかかりました、正直言って小説を書くのはしんどいですね。読む方が楽でいいです。

読者の皆様ありがとうございました。執筆中にまた何人かの方が読んでくれましたでしたね、こんなド素人の2作目を読んで頂きありがとうございます。感謝、感謝です。

本当は半導体の前工程の知識は全く無いので、ちょこっただけ”よくわかる何とかシリーズ”をペラペラっと見ました。途中でネタが切れてどうしようかと思いましたが何とか完筆出来ました。

恥ずかしい話ですが、文章の何処で段落、改行していいのかも分からないので小学生の作文みたいな書き方になってます。変に段落改行すると読み難くなるので、少しずつ考えて編集しようかと思えます。

ほとんど、思いつきで下書きせずにダイレクトに書いているので、最後の方で文字カウントがギリギリになってきました。これはやばいなと思って最後だけはさすがにちよつと下書きしました。

最後の方の展開は映画ダイハード見たいなシーンになりました。私の頭の中では妄想力全開です。

相川真理はもっと知的な女性に書こうと思ったんですが、書いているうちにだんだん天然ボケ娘になってしまいました。

田町由香里の言動も思いつきで書いているのですが、この娘がまたいい味を出してくれるんです。小説を書いていると登場人物は物語の中で勝手に動き出すんですね。おもしろいですね。

あっ、忘れてました。田町の姉の小百合はどうなったんでしょうか？ 神崎とデートさせようと思っていたのに・・・

それでは、また、どこかでお会いしましょう。

追伸

作者名を改名させて頂きます。

気まぐれ者なのでお許しください。

画面の下に”小説家になろう 勝手にランキング”って言うボタ
ンがある様です。

よかったら、ポチっと押してね！

第二章 契約

4人は駅前の商店街を歩いて居酒屋に入った。店の暖簾をくぐると神崎はカウンターを覗いた。

「あっ、神崎さん、いらっしやいませえ！」

顔馴染みの店員が神崎に威勢良く声をかけた。

「まだ、時間が早いから空いているな」

「そっすね、神崎さん今日は座敷で行きますか」

「そうだね、奥の座敷にしよう、ちょっと広いから」

田町は店員に声をかけた。

「お兄さん、奥の座敷でお願い」

「はい、どうぞ」

4人は靴を脱ぐと座敷に上がった。

「お兄さん、とりえず生ビール4つ持って来て」

田町がビールを注文した。

「あっ、田町、真理ちゃんはまだ飲めないよ」

「あっ、そっか！　ねえ、ねえ、お嬢、本当はちょっと飲めるでしょう？」

「田町先輩、私ビール飲んだことないです」

「うそお、私なんか小学校の時から家族で飲んでたわよ」

「マジですか？」

「お譲、ちょっと飲んでみる」

「先輩、私、頑張ります」

相川が田町の顔を見た。

「だめえ、真理ちゃんはソフトドリンクだからね」

「えへへ、ちょっと修行させてあげようかと思ったのに神崎さん堅いっすね」

「田町のは酒行だろう、明日、仕事出来なくなったら困るからね」

「お兄さん、ウーロン茶ひとつ持って来て」

神崎が店員にウーロン茶を注文した。店員はビールとウーロン茶それに突き出しをすぐに持ってきた。

「それじゃ乾杯しようか」

「かんぱーい」

「うーん、うまいっすね、これがないと仕事なんてやってられないっすよ、ほんとに」

田町はいきなりジョッキを半分位空けてしまった。

「田町さんは飲みっぷりが凄いですね」

石川は田町を見て感心していた。

「うふ、そっすか、惚れた？」

「はあ？」

「あれ？　ところで石川さんはどこの部署なんですか？」

「私は中国の上海工場から帰って来たばかりなんですけど神崎さん

の部署に配属される予定です」

「えっ、じゃあ私達と同じ部署じゃない！」

「ええ、部署は同じですね、神崎さんの部下になるんです」

「えっ、神崎さんの部下って？」

「神崎さんは主任技師に昇格されたんですよ」

「えっ！ 聞いてないっすよ！ 初耳っす！」

「神崎さん本当っすか！」

田町は神崎の顔を覗き込んだ。

「そうみたいなんだ」

「そうみたいって何っすか？」

「いや、帰り際に中村課長からそう言われたばかりなんだ」

「そうなんだ、神崎さん、おめでとうございます」

「みんな、もう一回乾杯しましょう」

「かんぱーい」

3人は神崎のジョッキに自分のジョッキをぶつけた。田町は大喜びで一気にジョッキを続けて2杯あけてしまった。

「おいおい、田町、まだ料理の注文もしてないぞ」

「神崎さん、今日はハイテンションで行きますからね、覚悟してくださいよ」

「石川ちゃん、倒れるまで一緒に飲みましょうね、倒れたらお持ち帰りしてもいいから」

「マジですか？」

「マジっすよ！」

「ハハハ、神崎さん、田町さんって面白い人ですね」

石川は楽しそうにゲラゲラと笑った。

「スイッチ入っちゃった・・・石川君かわいそう・・・」

「えっ、何ですか？」

「いや、何でもないよ、石川君、田町は面白いだろう、ハハハ、ハア・・・病気出たか・・・」

「とりあえず料理を注文しようか」

神崎はカウンターにいる店員を呼んだ。神崎は料理の注文を適当に頼み終えたとみんなの紹介を始めた。

「石川智樹君はね、俺と同期入社なんだ、高専卒だから年下だけだね」

「神崎さんとは新入社員研修で1年間一緒だったんです」

「そうなんだ、じゃあ昔から知り合いなんですね」

「そうだね、彼は理工系なんだけど語学も出来るから海外勤務になったんだ」

「すごいっスね、エリートじゃないっスか」

「そうだよ超エリートさ」

「神崎さん、持ち上げ過ぎですよ、私はエリートじゃないですからね」

「そんなことはないさ、新入社員で即海外勤務した社員なんて当時君だけだったからね」

石川は少し照れて頭をかいた。

「この二人はね、技術課管理係で技術評価のデーター管理とか評価進行管理をしているんだ」

「田町由香里は石川君と同じ高専卒で入社2年目、相川真理は高卒でピカピカの新入社員なんだ」

「二人とも凄い美人ですよね」

「それ、さっきも言ったよ」

「うん、でも本当に綺麗ですから」

石川はまた少し照れて頭をかいた。結構いい男だが純情そうだった。

「石川ちゃん中国の話してよ」

「えっ、中国ですか、いいですよ、どんな話がいいですか」

「うふ、田町は夜のお話がいいな、アウトサイドなのとかいいっすね」

田町が色気を見せて酒を注ぐので石川は結構なペースで飲んでいった。

「ねえ、神崎さん、田町先輩っていつもこんな調子なんですか？」

相川が神崎の耳元で話した。

「そうだよ、飲むといつもこんな調子さ、夜の女王様だからね」

「私も飲んだらなれるかな？」

「えっ？ 意味わからないけど？」

「お酒飲める様になったら付き合ってね」

相川はそう言うのと神崎に右目で軽くウインクした。

神崎は飲みかけたビールをふいてしまった。

翌日、朝会が終わると神崎はパソコンのメールをチェックしていた。

「ああ、気持ち悪い、やっぱり飲みすぎたな」

神崎は机の引出しから胃腸薬を取出すとペットボトルの水で薬を飲んだ。

水を飲みながら田町の方を見ると彼女は全然平気らしく、少し鼻歌を歌いながら仕事をしていた。

「石川君かわいそうに予想通りノックダウンしてたなあ・・・」

神崎はメールの受信リストを下から上へ順番に眺めた。自動配信の技術データーはとりあえず別ホルダーに収納して重要なメールだけを画面に残した。

「えーと、今日は会議案内が2件入っているな、定例品質会議と特別カスタマー対応会議か？ あれ？ 何だこれ？ 会議場所は特別応接室？ メール送信者は誰だろう？」

・・・ 加納剛太？ えっ！ うちの社長か！ メールの配信メンバーは誰だ？」

神崎はメールのカーボンコピー（CC）で配信者をチェックした。

「上島幸雄、尾崎秀一、神田正一、島裕次郎、中村勝男、・・・何だこの会議は、社長、副社長、専務、常務、開発本部長・・・中村課長も入ってるな、かなり重要な顧客対応みた

いだな・・・」

午後13..30

神崎は人事棟の廊下を中村課長と一緒に歩いていた。

「中村課長、特別カスタマー対応会議って何でしょうね」

「ああ、俺も内容は聞いていないんだ」

「特別応接室なんて入ったこともないですよ」

「ああ、ここだな」

中村は特別応接室のドアを開けた。

「失礼します」

中村と神崎は経営首脳陣に頭を下げた。

「ああ、中村課長、こっちに座れ、君もこっちだ」

開発本部長の島裕次郎が中村課長と神崎を呼んだ。

「久しぶりだな、中村課長、そっちは神崎君か」

「はい、神崎です、よろしくお願いします」

本部長の島裕次郎は中村課長の旧職場の元上司で人間味のある人だ。

「島本部長、今日は何の会議なんでしょうね？」

中村課長は島本部長に小声で聞いた。

「何か大きな商談があるそうだよ俺も詳しくはまだ聞いてないんだ」

「えっ、そうなんですか？」

「分かっているのはエネルギー関係のデバイス開発で商談先はC M D社らしい」

島本部長は中村課長に小声で答えた。

えっ、C M D社・・・もしかして・・・真田先輩か？

神崎は昨日の解析依頼の件を思い出した。

「そろそろ時間だな、村田君、会議を始めようか」

加納社長が技術営業課の村田課長に指示を出した。

「技術営業課の村田です、みなさんお忙しい中ご苦労様です。ええ、昨日、C M D社様から大口の商談が入りましたのでご報告致します。商談内容は新規半導体パワーデバイス

スの共同開発です。このデバイスは高エネルギー蓄電半導体という全く新しい分野の商品でございます。開発契約金として1000億円の支払いをC M D社様が提案されてお

ります」

応接室の中が一気にざわついた。

「何だって契約金1000億円！」

中村課長と神崎は顔を見合わせた。

「こりゃ凄いな、ビッグビジネスだ！」

島本部長も感嘆していた。

「尚、開発研究に掛かる費用の一切はCMD社様がご負担されます。当社は高エネルギー蓄電半導体の製造工法を開発し、その技術をCMD社に提供いたします」

応接室の中がさらにざわついた。

「開発研究費用をCMD社が全額負担だって!？」

中村課長と神崎はもう一度顔を見合わせた。

「また、CMD社開発プロジェクトチームの真田様が契約執行の為、本日来社される予定でございます」

やっぱり真田先輩だ。何か大変なことになって来たぞ。嫌な予感がするなあ……

神崎は真田が嫌いな訳ではなかった。むしろ技術者として尊敬出来る先輩だった。真田はエキセントリックなところもあるが腕は確かだ。問題なのは真田が神崎に解析依頼

した例のブラックチップだ。

村田課長は一連の報告を終えると自分の席に着いた。

「村田課長、ひとつ質問があるんですが」

島本部長が村田課長に手を上げた。

「はい何でしょうか」

「C M D 社は何故我社に共同開発を提案してきたのでしょうか？
C M D 社ほどの超一流企業であれば自社の研究開発部門で十分対応
可能かと思いますが？」

「はぁ・・・」

村田課長は島本部長の質問に答えられないので頭をかいた。

島本部長の質問は鋭いな・・・冷静な人だ。

神崎は心の中でそう思った。

「そうだな、少し契約の規模が大き過ぎるかも知れないな？」

加納社長は腕を組みながら島開発本部長の顔を見た。

「しかしながら、ビッグチャンスであることは確かだ、逃がす訳には
いかないぞ島君」

「はい、それは承知致しますが我社は基本的に評価装置の製造メー
カーです」

「そうだな・・・島君の言うとおりだ」

「ただ、我社の半導体解析技術だけは日本でもトップレベルにある
と思います。C M D 社は我社の半導体解析技術に目を付けたんじゃない
でしょうか？」

「まあ、それなら納得出来る話だ」

「いずれにしても半導体製造工法開発チームの新設が必要です」

「よし、工法開発チームを発足しよう！ 島君、メンバーの人は
君にまかせるぞ！」

「わかりました、近日中に人選いたします」

島本部長は工法開発チームの人選を了解した。

「とは言うものの・・・うちの会社に半導体製造工法の開発が出来るやつなんていたかな？」

島本部長は下を向いて小さな声でつぶやいた。

「いますよ、ここに」

中村課長が神崎を指差した。

「えっ、神崎君か？」

「そうです、神崎は半導体の解析から製造工法の検討まですべて出れます！」

「よし！ 決定だ！ 神崎君！ 君をチームリーダーに任命しよう！」

「島本部長マジですか？」

「マジだよ、頼んだぞ、神崎君！」

「島本部長ちよっと待ってください、私は平社員ですし管理職の経験ありません」

「島本部長大丈夫です、神崎はこの5月から主任技師に昇格しますので問題ありません」

「そうか、それなら好都合じゃないか人事規定でチームリーダーは主任職以上になっているからな」

「そうですね、ぜひ神崎にやらせて下さい！」

中村課長が島本部長の後押しをした。

はぁ・・・やっぱり嫌な予感的中してしまった。

まいったなあ、いきなりチームリーダーなんて出来るのか？ 俺？

「村田君、C M D社との会議は15時30分だったな」

「はい、そうです」

「よし、事前会議はこれで終了しよう」

社長は時計に目をやると席を立った。

「ああ、島本部長、ちょっと社長室に来てくれ」

「ああ、はい」

「それから、解析技術課の中村課長、それと神崎君も来てくれ」

「えっ、私と神崎もですか」

「そうだ」

社長はそう言うのと応接室のドアを自分で開けて出ていった。

「それでは15時15分から会議を再開致しますのでよろしくお願い致します」

村田課長はそう言うのと会議メンバーに頭を下げた。

応接室を出ると島本部長、中村課長、神崎の3人は社長室に向かった。

「中村課長、ワクワクしないか」

「はあ？」

「久しぶりの大仕事になりそうじゃないか、ハハハ」

中村課長と神崎はかなり緊張していたが島本部長は愉快そうに笑っていた。

第三章 スーパーチャージデバイス

社長室の前に行くと社長秘書が3人に頭を下げて社長室のドアを開けた。

社長室に入ると加納社長は応接ソファに座って資料を見ていた。

「失礼します」

本部長が社長に頭を下げた。

中村課長と神崎もあわてて頭を下げた。

「おお、まあ座れ」

「はい、失礼します」

加納社長は資料から目を離すと島本部長の顔を見た。

「島君、俺はこの契約に社運をかけてみようと思うんだ」

「はい」

「ただし、さっきも言ったが契約の規模が大き過ぎると思うんだ」

「そうですね、契約金1000億は常識の範囲をはるかに超えてますからね」

「本当に出来そうか？」

「はあ？」

「これだけの規模だと失敗は許されない、もし失敗したら会社の信用を一気に失ってしまうからな」

「まあそうですね」

「いや、実はちょっと不安なんだよ、みんなの前では言えなくてね」

社長はそう言うのと頭を少しかいた。

「まかせてください、若手社員の精鋭部隊でチーム編成すれば行けると思います」

「そうか、君がそう言うてくれると心強いな、で、どんな人選でいいかね」

「今回は解析技術課と新規設備開発技術課の共同戦線しかないと思います。我社は基本的に評価装置の製造メーカーですから半導体の製造ラインがありません。半導体製造そ

のものは社外に委託して出来上がったサンプルを評価する方法がいいでしょう。解析技術課と新規設備開発技術課から精鋭を募ります」
「それで行こう！」

「それで社長、工法開発チームリーダーなのですが、解析技術課の神崎君にやってもらおうと思います」

「よし！ 分かった！ 頼むぞ！ 神崎君！」

社長が神崎の肩を右手でポンと叩いた。

「社長、本当に私でいいんでしょうか？」

「ハハハ、いいとも、実は俺も神崎君がいいと思っていたんだよ」

「はあ？ 社長ですか？ でも何故私なんですか？」

「由香里がよく君の話をしていたな」

「ええ？ 由香里？」

「田町由香里だよ」

「はあ？ 田町がですか？ 何で社長に？」

「田町由香里は俺の姪っ子なんだよ、俺の姉の娘だ」

「ええっ！ 加納社長は田町の叔父なんですか！ 聞いてないですよそんな話！」

「ハハハ、神崎君が聞いてなくても俺は由香里から良く話を聞いているぞ、半導体解析の天才だってな」

「中村課長、田町が社長の姪だなんて知ってましたか？」

「俺も初耳だ」

「島本部長は知ってましたか？」

「ああ、俺は知ってるよ」

神崎と中村課長は口をポカンと空けて社長を見た。

そう言えば会議メンバーは重役ばかりだったな・・・おかしいと思ったんだ。

「神崎君、責任は重大だが君の様な若手社員がこれからの事業をリードして欲しいんだ、ぜひ頼むよ」

「加納社長、非常にありがたいお話なのですが・・・」

「何だ駄目か？」

「実は昨日C M D社の評価サンプル解析依頼を真田さんから直接受けました」

「何だって!？」

「真田さんは私の大学時代の先輩なんです」

「それはすごいじゃないか神崎君、好都合だよ」

「まあ、真田さんは大尊敬する技術者なんで問題はないんですが・・・」

「何だ？」

「依頼された評価サンプルが問題なんです」

「評価サンプルがどうした？」

「ブラックチップのC S Pなんです」

「ブラックチップ?・・・もしかして例のブラックウエハか？」

「そうですブラックウエハをダイシングして作ったC S Pです」

※ダイシングとは半導体ウエハを切り刻んでひとつのチップにする
ること。

「何だって！　またブラックウエハか！」

中村課長が驚いて神崎の顔を見た。

「おい、おい、おい、神崎マジか！？」

「マジです、中村課長！」

「そりゃかなり危険だぞ！　俺もブラックウエハの件では懲りてる
からな！」

そう言う中村課長は左手を摩った。

「そのサンプルが例の一件と同じものなら確かに危険だな」

島本部長は腕を組んだ。

「加納社長、ブラックウエハの事件は社内秘にはしてありますが、
たぶんみんな知ってますよ」

「そうだな．．．あの事件は警察関係者の捜査も一部入ったからな
．．．かなり危険な代物の様だな」

「これは神崎君が言う通り契約の見送りもありかも知れませんが」

「んん．．．しかし1000億の契約を見送るのも勇気があるな」

社長は考え込んでしまった。

「社長、まずはCMD社の説明を聞いてからにしましょう」

「よし、そうだな、その時点で怪しければ契約を破棄しよう」

社長は膝を叩くと席を立った。

「よし、ちょっと休憩しよう」

「小百合ちゃん、コーヒー入れてくれる？」

「はい、わかりました」

社長はドアを開けて秘書にコーヒーを注文すると席に戻ってきた。しばらくすると秘書が部屋に入って来た。

歳は20代後半だろうか、髪はストレートでとても品のある美人だ。

彼女は4人分のカップを置くと社長からコーヒーを注ぎ始めた。最後に神崎のカップにコーヒーを注ぐと彼女がチラッと神崎の顔を見た。

一瞬、神崎と彼女の視線が合った。

あれえ、誰かに似てるな・・・

「神崎さん、いつも由香里がお世話になってます」

秘書はちよつと首を傾げて微笑んだ。

「えっ？」

神崎は彼女の言葉に固まってしまった。

「ああ、小百合ちゃんは由香里の姉だよ」

社長が神崎に言った。

「えっ！ 田町は男兄弟だと言っていましたよ」

「ええ、私の下に弟が二人いて由香里は一番下なんですよ」

「えっ！ ええっ！ マジで！」

「マジっスよ神崎さん！ …… って由香里はこんな感じでしょう？」

「はあ… そんな感じです」

「うふふ… 」

彼女は神崎にまた微笑むと一礼して部屋から出ていった。

神崎はドアの方を向いてポカンとしていた。

「神崎君、おい神崎君」

「えっ」

神崎が振返ると社長が笑っていた。

「気をつけろよ」

「はあ？ 何がですか？」

「小百合は肉食系だからな」

「え？ 肉が好きなんですか？」

「ハハハ、違うよ、男好きだって言う意味さ、ボヤッとしてると食われるぞ」

「えっ！」

神崎はまた固まってしまった。

「そうそう、ブラックウエハの件で思い出したんだが相川君は元気にやってるかい？」

島本部長が神崎に聞いた。

「はぁ？ 相川ですか？」

「そう、相川真理ちゃん」

「え？ 島本部長は何で相川を知っているんですか？」

「知ってるも何も俺が口説いて入社させたんだよ」

「えっ？ 島本部長がですか？」

「ああ、そうだよ、まあ正しく言えば俺と加納社長がだけどな、ハハ」

「はぁ？」

島本部長は神崎の顔を見て笑った。

「ああ、例の女子高生ハッカーかね」

「そうです、我社のネットワークに進入して神崎君の技術データーを根こそぎ持ち出した娘です」

「中村課長、相川君はどうだね」

社長が中村課長に聞いた。

「彼女の情報処理能力は抜群ですからね、田町と並んで有望な人材です」

「そうだろう、島本部長のご推薦だからな」

そう言うことか！ だから相川はこの会社に入社したんだ！

「中村課長は相川が島本部長の推薦で入社したことを知っていたんですか？」

神崎が中村課長に聞いた。

「ああ、新入社員の配属連絡を人事から受けた時に事情を聞いたんだよ」

「何だあ、私にも言ってくださいよ」

「ハハハ、神崎、それは言えないよ」

「課長、水臭いですよ」

「まあ、これは管理職の掟だ」

「島本部長、相川は来月から神崎の部下につける予定です」

「そうか、神崎君はいい部下をもらったな」

「はい、それは私もそう思います」

神崎は島本部長に嬉しそうな顔を見せた。

午後15:00

「社長、そろそろ会議のお時間です」

秘書の田町小百合がドアを開けて社長を呼んだ。

「よし、CMD社と一戦交えるか」

社長は自分の顔を小さく平手打ちして気合を入れるとソファから腰を上げた。

「みんな行くぞ」

「はい」

社長が部屋を出ると島本部長、中村課長、神崎がその後に続いた。

最後に神崎が部屋を出ようとした時、田町小百合が神崎のユニフ

オームの後ろを軽く引張った。

神崎が後ろを振り向いた瞬間、彼女は小さく折ったメモ用紙を神崎の手の中に素早く押し込んだ。

「行ってらしゃいませ」

彼女はみんなに一礼すると社長室のドアを閉めた。

神崎が歩きながらも一度後ろを振り返ると田町小百合が腰の下で小さく手を振っていた。

「・・・？」

神崎は歩きながらメモ用紙を前の3人に見られない様にこっそり開いた。

” 神崎様、週末は空いてますか？ 携帯 XXXX—XXXXX—XXXXX 妹には内緒よ！ 小百合より ”

「うわっ！ 噛まれた！」

「ん、どうした神崎」

中村課長が振り向いた。

「いえ、何でもありません」

神崎はあわててメモを握り潰した。

「・・・？」

中村課長は前を歩きながら首を捻った。

午後15…15

特別応接室には課長以上の経営幹部が再び集まった。しばらくして村田課長が部屋に入ってきた。

「社長、CMD社の真田様が来社されました」

社長は背広の袖を少し引張ると自分の腕時計で時間を確認した。

「よし、入室してもらえ」

「わかりました」

村田課長が応接室のドアを開くとCMD社の来客が部屋に入ってきた。CMD社の来客は3人だった。

新光技術工業社の経営幹部は全員椅子から立上がると来客に頭を下げた。

「こちらにどうぞ」

村田課長が3人を席に案内した。

「失礼します」

CMD社の3人の来客は一礼すると席の横に鞆を置いた。

「社長の加納でございます、本日はよろしくお願い致します」

「CMD社の真田です、よろしくお願い致します」

「尾崎でございます、上島でございます、神田でございます、島でございます」

次々と挨拶が始まり名刺の交換が始まった。

「神崎です、真田先輩、お久しぶりです」

「おお、神崎、よろしく頼むで」

神崎が名刺を出すと真田がニコッと笑った。

「CMD社の村上です、CMD社の北堀です、よろしくお願い致します」

「神崎ですよろしくお願い致します」

神崎は他の二人からも名刺を受け取った。名刺には、主任技師
村上考博、技術秘書 北堀博美と書かれてあった。

二人ともメガネをかけていて、とても頭が良さそうだった。

名刺交換が終わって会議メンバーは全員席についた。

「それでは会議を始めます、CMD社様よろしくお願い致します」
「本日、私共は御社との技術提携契約を結びたく来社致しました。
まずは弊社のプレゼン資料と開発サンプルを皆様にご提示させて頂
きます」

真田は部下の北堀にプレゼン資料の準備を指示した。

北堀は鞆からモバイルPCを取出してディスプレイにプレゼン資

料を表示した。

「村田様、御社の会議システムに無線接続してよろしいでしょうか」
「許可致します、この応接室の会議システムはスタンドアロンです
ので問題ありません」

「無線アクセスコードはXXXXX—XXXXX—XXXXX—XXXXX
です」

北堀が会議システムにアクセスすると応接室天井のプロジェクタ
ーが自動点灯を始めた。そして応接室の壁にCMD社のプレゼン資
料が高輝度LED光で瞬時に表示された。

「それでは弊社技術提携案と新規開発商品の説明をさせていただきます」

真田は壁に映写されたプレゼン資料の説明を始めた。

「弊社の技術提携案につきましては書面にて御社へ事前打診してお
ります。内容につきましては皆様すでにご承知のことと思います。
技術提携案の骨子は弊社高エネルギー蓄電半導体の量産技術確立支
援で御座います。開発契約金としては1000億円、開発研究に掛
かる費用の一切は弊社が負担致します。弊社の技術提携案は以上で
御座います」

何かご質問があれば承ります」

契約内容の概要を話終えると真田は会議メンバーの顔を見渡して
契約執行についての質疑を求めた。

「真田様、御社契約内容については理解致しましたが、一件質問が
御座います」

「はい、何でしょうか」

「御社は何故我社に共同開発を提案してきたんでしょうか？ 御社ほどの超一流企業であれば自社の研究開発部門で十分対応可能かと思えますが？」

島本部長が事前会議での質問内容を真田に尋ねた。

「いい質問ですね、お答えしましょう」

真田は少し苦笑いしながら島本部長の顔を見た。

「半導体にはウエハーを処理する前工程とチップを加工組立する後工程があります。弊社はもともと組立技術に特化して成長してきた会社です。だから今まではウエハー処理

を別の会社に委託してたんですわ、ウエハーの開発には膨大な研究開発費が掛かりますからね。ウエハー処理を内製化し始めたのはつい最近で製造技術力はまだまだです。特

に歩留を上げる為の解析技術力がかなり低いんですわ」

真田はちよつと頭をかきながら話した。

「まあ、それでも、即在の製造技術やったら中小企業を買収すれば何とかなるんですけど、しかし、今回の話は違います。世の中の何処にも無い製造技術工法を生み出さん

と成功は無理です。弊社も社運をかけてますさかいね。そこで、日本トップレベルの半導体解析技術力を持つ御社と組みたいわけですよ」

真田は手を組んで島本部長の顔を見た。

島本部長は腕を組むと「うゝん」と唸って加納社長の方を向いた。

「真田様、事情はよく分かりましたが、契約金の1000億円は弊社には規模が大き過ぎると思うんですが？」

加納社長が真田に問いかけた。

「いえ、決して大きい金額ではありません。この商品の市場規模は年間30兆円以上と弊社は予想しています」

真田は加納社長の顔を見ると微笑んだ。

「えっ！ 年間30兆円！？」

加納社長は一瞬に固まってしまった。応接室の中が一気にざわついた。

「そうです、市場規模が年間30兆円以上ですから契約金の1000億は決して大きい金額ではありません」

真田は加納社長の顔を見るとまた微笑んだ。

「他に質問はありますか？ 無い様でしたら、開発商品の説明を致します。村上君、サンプルを出してくれるか」

「はい」

村上はアルミトランクを開くと中からサンプルを取出した。

「これが、高エネルギー蓄電半導体セルです」

黒い包装容器を開けるとその中から一枚のセル基板が出てきた。

セル基板には50個程の半導体パッケージが片面実装されている。

会議メンバー全員が身を乗り出してサンプルを見つめた。それはパソコンのマザーボードの様な形をしていて大きさはB5サイズ位でかなり薄かった。

「それでは開発商品の説明をさせて頂きます。北堀、技術資料を映してくれるか」

「はい」

北堀がモバイルPCのアイコンを指で軽く叩くと壁に技術資料が表示された。

「これが、高エネルギー蓄電半導体セルの構造図です。使用用途は電気自動車及び民生産業用の電源として使用致します。このセル一枚で電気自動車は100kmの走行が可能です」

「能です」

「これ、一枚で100kmですか？」

「そうです」

「電気自動車用としてはセル10枚で1ユニットとした商品を考えています」

「という事は1ユニットで1000km走れるんですね！　すごい！」

「そうです」

島本部長が唸った。

「セル一枚の充電時間は約3秒です」

「えっ！ 瞬間じゃないですか」

「そうです、瞬時充電いたします。充電方式は非接触マイクロ波充電、使用電圧は1ボルト～50万ボルト、容量は．．．電流は．．．etc」

真田は淡々と商品の説明を続けた。

新光技術工業社の会議メンバーは全員が口をポカンと空けて真田の話聞いていた。

なんて桁はずれな半導体なんだろう。この半導体が量産出来れば確かに世の中の構造が変わってしまうな。真田先輩が言う市場規模30兆円はうそじゃない様だ。未来の新

技術はもう目の前まで来ているのか。

神崎は背中がぞくぞくした。

「以上で弊社新規開発商品の説明を終わらせて頂きます。何かご質問は御座いますでしょうか？」

真田はプレゼンを終わると新光技術工業社の会議メンバーに質疑を求めた。

「真田様、一件質問が御座います」

「はい、何でしょう」

「高エネルギー蓄電半導体セルに使用されるチップについてですが、
．．．」

「はい」

「ウエハは御社で独自に設計開発されたんでしょうか？」

島本部長が真田に尋ねた。

「ウエハですか？」

真田はちよと苦笑いしながら島本部長の顔を見た。

「そこは企業秘密なんで今は答えられません、御社との技術提携契約が成立した後であれば秘密保持のクロス契約も成立しますので回答は可能です」

真田は口を濁した。

「島様、その質問の意図は何でしょうか？」

真田が逆に島本部長に質問を返した。

「それは、こちらも企業秘密でお答え出来ません」

島本部長も口を濁した。

「島君、まあ、その件はいいだろう。真田様、わかりました、素晴らしい開発商品です、量産技術確立支援を喜んでお引き受け致します。お互いに利益のある契約ですか」

「問題はありせん」

加納社長は契約をOKした。

「ありがとうございます、契約成立ですね」

真田は右手を前に出して加納社長と握手を交わした。

第四章 フロントエンド

5月

高エネルギー蓄電半導体の製造ラインを見学する為に神崎は相川を連れてC M D社に初来社した。

神崎と相川はC M D社の保安所で入門申請を済ませると保安員から臨時のセキュリティカードを受け取った。

「しばらくお待ち下さい」

保安員はそう言うとC M D社の開発プロジェクトチームに内線電話をかけた。しばらくすると真田が神崎と相川を直接出迎えた。

「おお！ 神崎、遠いところ御苦労やなあ」

真田は右手を少し上げると神崎に声をかけた。

「真田先輩お世話になります」

神崎は真田に頭を下げた。

「ハハハ、神崎、先輩なんて呼ぶなや」

真田は笑いながら右手を小さく振った。

「じゃあ真田さんでいいですか」

「それでO Kや、あ、そっちのベッピンさんは誰や」

「部下の相川ですよろしくお願いします」

相川も真田に頭を下げた。

「こちらこそ、よろしく頼みますわ」

真田も相川に頭を下げた。

「ん？」

真田は頭を上げて相川の顔を見つめた。

「あれっ？ どっかで見たことある顔やなあ」

真田はそう言うと言を傾げた。

「あれ？ 私もどこかで見たことがあります」

相川も真田の顔を見つめると首を傾げた。

「あっ、わかった、関西弁のお兄ちゃんや」

相川は突然関西弁で話すと真田を指差した。

「あっ、俺もわかったぞ、相川教授のお嬢やないか！」

真田は太股を軽く叩くと相川を指差した。

「ほんまかいな？」

「ほんまや！」

「アハハハ！」

相川がまた関西弁で話すと真田は大笑いした。

「神崎、もつと早よ言えよ」

「はっ？ はあ？」

「しかし、奇遇やなあ神崎、こんなこともあるんやなあ」

「そうか、真田さんも相川と面識があったんですね」

「ああ、そうや、相川教授は俺の恩師やからな、まあ神崎もそうや
ったやろうけど、相川家には随分お世話になったもんや」

「そうだったんですか、ところで真理ちゃんは関西弁話せるの？」

神崎は相川の顔を見た。

「えへへ、神崎さん、私は関西弁出来ないわよ」

「えっ？ 今話したじゃない」

「条件反射です」

「条件反射？」

「そう、真田さんの顔を見たら自然に出ちゃった」

「お嬢が小学生の時に俺が教えたったんや、だから自然に覚えとる
んやろう」

「そやねん、あら、また関西弁出ちゃった」

「ハハハ、面白いやつちゃな、ほな、行こか、工場案内したるわ」

真田はそう言うのと笑いながら工場に向かって歩き出した。

工場の入口に着くと真田の部下の村上と北堀が出迎えた。

「ようこそ神崎さん」

村上と北堀が神崎に右手を差し出した。

「よろしく願います、村上さん、北堀さん」

神崎は2人と握手を交わした。

「こっちは部下の相川です」

神崎は右手を出して相川を2人に紹介した。

「相川です、よろしく願います」

相川は挨拶をすると2人に頭を下げた。

村上と北堀も相川に挨拶をすると頭を下げた。

村上は顔を上げると相川の顔をしばらく見つめてポーとしていた。

「村上！ おい村上！ 神崎さんと相川さんを案内してくれるか！」

「あっ！ はい！ こちらへどうぞ！」

村上はあわててセキュリティカードをキーボックスにかざすと自動ドアを開けた。

「ここで少しお待ちください」

村上は神崎と相川を来客室に案内すると部屋からすぐに出て行った。

神崎と相川は席に鞆を置くと来客室の窓から外を眺めた。

「神崎さん、もう5月なのに山の上にまだ雪がいっぱいありますよ」
「ああ、そうだね、半導体の工場は雪国の山の近くに多いんだ」
「なぜですか？」
「ウエハの洗浄工程で水を沢山使うから地下水が必要なんだよ」
「そうか、だから山の近くに工場があるんですね」
「そのとおり」

神崎が説明をしていると来客室のドアが開いた。

「お待ちせ」

真田と村上がノートPCと紙の資料を抱えて部屋に入ってきた。

「まあ、座ってや」

「はい」

神崎と相川が席に着くと北堀がお茶を持って部屋に入ってきた。

北堀がお茶を配り終わると真田が話を始めた。

「いきなりで申し訳ないんやけど、この後すぐ現場に入って欲しいんや。通常の工程見学はクリーンウエアを着てウィンドウツアーで窓の外から見てもらうんやけど、君らは

特別や、情報セキュリティランクAAAの機密ゾーンまで自由に入ってええからな。思う存分、製造工程を見て行ってくれ」

「はい、ありがとうございます」

「北堀、2人にAAAのセキュリティカードを渡してくれるか、あと、クリーンウエアの準備してや」

「はい、クリーンウエアの準備はすでに出来ています」

「そうか、ほな、神崎、クリーンルームに早速入るか、工程説明したるわ」

「はい、了解です」

「北堀がコンシェルジュするさかい、わからんことがあったら何でも聞いてや」

「コンシェルジュって何ですか？」

「フランス語や、まあ日本語で言うたら総合案内役やな」

「わかりました、よろしくお願いします」

神崎と相川は北堀に小さく頭を下げた。

北堀も少し微笑みながら丁寧に頭を下げた。

「村上には技術サポートを担当させるさかい、技術的に解らんことは村上に何でも聞いてや」

「はい、わかりました、村上さんよろしくお願いします」

「いえ、こちらこそ、ご指導よろしくお願い致します」

村上も神崎と相川に丁寧に頭を下げた。

「ほな行こか」

真田が立上がると北堀が来客室のドアを開けた。

クリーンウエアに着替えた神崎たちはエアークシャワー室に入った。エアークシャワー室の自動ドアが閉まると両サイドのブローアーから強力な風が吹いた。

「うわー凄い！ 台風みたい！」

相川が嬉しそうにはしゃいだ。

「ハハハ、お嬢はクリーンルームに入ったことがあらへんのか」

「はい、入室するのは今回が初めてなんです」

「そうか、ええ勉強な」

「そうですね」

ブローアの風が止まると、しばらくしてエアークシャワー室の扉が自動で開いた。

神崎たちはC M D社のクリーンルームに入室した。

「うわっ！ 凄い！」

神崎はクリーンルーム内を見渡した。

「真田さん、このクリーンルームは直線で100メートルはありますね？」

「そうやな、正確には150メートルや」

「なんて、広いクリーンルームなんだ！」

「このクリーンルームは半導体の前工程を直線で完結させとんね、ここはウエハの最終検査をするプローブ検査工程や、拡散工程のスタートは一番奥やさかい、向こう側から

説明しよか」

※拡散工程とはウエハの処理工程で半導体組立製造の前工程のこと。

神崎たちはクリーンルームの中央通路をゆっくりと歩き始めた。

中央通路の左右には各工程ごとに独立した部屋があり、ガラス越しに色々な装置が並んでいるのが見えた。各部屋の入り口は全て2重の自動ドアになっている。

「凄いですね神崎さん、半導体の工場ってSF映画みたい」

相川はクリーンウエアから少しだけ見えるかわいい大きな目をキョロキョロさせた。初めて見る半導体工場に興味津々の様だ。

神崎は通路の床と天井を交互に眺めていた。

銀色に光る通路はオールステンレス製で床板には小さな丸穴が空けてある。天井にはアンテナの様なものが等間隔で設置されていた。

「真田さん、床がパンチングメタルになってますね、中央通路までダウンフローにしてあるんですか？ それに空間電荷型イオナイザーで通路全体を除電してますね」

「ここは通路でもパーティクルと静電気の管理はかなり厳重にやってんね、清浄度は通路でもクラス10や」

※クラス10とはクリーンルームの清浄度を表す。

※パーティクルとは微小な塵のこと。

凄いな、並の工場じゃないぞこれは・・・

神崎は心の中で思った。

しばらく歩くと途中から通路横のパーティションもステンレスに

変わった。

「床、天井、壁、全てステンレス製だ、ガラス窓も無いな、何だこの部屋は・・・？」

神崎がつぶやいた。

「ここが、ブラックウエハの製造工程や」

「窓が全くありませんね？」

「そうや、セキュリティレベルAAAのシークレット工程やさかい、うちの技術社員でも数人しか入れへんね」

「そうなんですか」

そう言うとき神崎は真田の顔を見た。

しばらくすると神崎たちは中央通路の一番奥までたどりついた。

2重の自動ドアを通り抜けるとそこには更にエアークシャワーが設置されてあった。

神崎たちはエアークシャワーの前で宇宙飛行士がかぶる様な透明なヘルメットを装着した。

「ここからはクラス6の環境になるんや」

そう言うとき真田はエアークシャワー室の入室ボタンを押した。

エアークシャワー室を通り抜けた神崎たちはブラックウエハの拡散工程に入った。部屋の中に入ると天井照明は全てイエローランプになった。

「うわっ！ 凄い広さだ！」

「本当！ 凄いですね神崎さん！」

神崎と相川はそのスケールの大きさに驚いた。

部屋の中は想像以上に広く、ずらりと並んだ拡散設備は十分なスペースをとって配置されてあった。大型拡散装置の外装は全てオールステンレス製で銀色に鈍く光っている

。設備の外から見えるのはウエハをセットする製品搬送部のみで装置内部は殆ど見えなかったが、設備のパイロットランプがグリーンに点灯し、装置が自動運転をしているのは分かった。装置の横には製品を次工程へ運ぶ為のエアシュートの様なものが全エリアに配置されている。製品はそこを通り抜けて天井に設置された無塵搬送ラインを流れていた。ウエハの生産は全て自動生産管理システムでコントロールされている様だ。次工程にたどりついた製品は天井の無塵搬送ラインから再びエアシュートで設備の前に降りてくる。クリーンルームの側壁にはウエハを化学処理する為のガスコントロールボックスがずらりと並んでいて、金属のガス配管が規則正しくベント（曲げ加工）されて各設備とつながっていた。

神崎は周辺を見渡して作業者を探したが作業者は殆ど見当たらなかった。

「ほな、神崎、工程の説明を始めよか、ここからは村上が説明するさかいな」

「神崎さん、相川さん、ここからは私が説明させて頂きます。まずは全体のフローを説明します」

村上は壁に設置された大型の平面パネルに触れると拡散工程のフ

ローを表示させた。

「通常のシリコン半導体ウエハー処理は大きく分けて基板工程と配線工程の2つから成ります。ブラックウエハーの製造工程もそこは同じです。まず基板工程ですが、ウエハーの

洗浄工程から始めて、酸化膜形成、CVD、フォトリソ、ドライエッチング、イオン注入、アニール、スパッタリング、CMP、寸法検査、そして次に配線工程ですが、洗浄

、CVD、スパッタリング、CMP、フォトリソ、ドライエッチング、寸法検査、アニールです。又、工程の一部で同じ処理を何回か繰り返します。」

村上はパネルをクリックしてCVDの工程フローを拡大した。

※CVDとはガスを化学反応させてウエハ上に薄膜を成長させる方法。

「ブラックウエハと通常のシリコンウエハーの製造工法が大きく異なるのは、このCVD工程です。弊社ではプラズマCVDを使用してカーボンナイトライドを成長させます。

特にここで弊社のブラックボックス技術を駆使してカーボンナノチューブを形成していきます」

村上は淡々と工程の説明を始めた。

「神崎さん、意味分かるの？」

「ああ、村上さんはすごく丁寧に説明してくれているよ」

「私、全く、意味わかりませんが．．．」

「後で俺が教えてあげるよ」

相川真理は不安そうに神崎を見た。

「えっ、相川さん、分かりませんか？」

村上がパネルから目を離して相川の方を見た。

「ああ、いいんですよ」

神崎は村上に小さく手を振った。

「そうですか？ もっと詳しく説明しましょうか？」

「いえ、大丈夫ですよ、相川には私が後で説明しますから、気にしないで続けて下さい」

「はい、それじゃ続けます。カーボンナイトライドの成長は表面反応律速が重要で．．．etc」

村上は淡々と工程の説明を続けた。

「じゃあ、工程の説明はこれ位にして実際の装置を見ていきましよう」

村上はパネルの表示を元に戻すと各工程ごとの詳細な説明を始めた。

神崎はクリーンノートに各設備の構造とプロセス条件を正確に記録した。

「そうか、この製造工程はCVDの一部工程を除いて強誘電体メモリの応用なのか・・・」

神崎は一瞬にしてブラックウエハの製造工法を習得していた。約2時間が過ぎて、ようやく村上の説明が終わった。

「以上でブラックウエハ製造工程の説明は終了です」

「村上さん、説明ありがとうございました」

神崎と相川は村上に丁寧に頭を下げた。

「神崎さん何か質問はありますか？」

「ええ、質問があります」

「何でしょうか」

「全体の工程能力から考えてCVD装置の数が圧倒的に足りない様ですが何故ですか？」

「うーん、鋭いですね、神崎さん」

村上は神崎の顔を見て感心していた。

「それは、俺が説明するわ」

真田が神崎に話かけた。

「ブラックウエハのCVD工程は装置も製造プロセスもまだ未完成なんや」

「そうなんですか」

「ああ、CVD工程はブラックウエハ処理工程の心臓部なんやが、この技術確立が出来てへんね」

「カーボンナノチューブがうまく形成出来ないんですか？」

「その通りや、そのところは村上があえて説明しなかったのによく分かったな」

「いえ、分かっていますけど勘です」

「勘でも最初からそう感じたのなら大したもんや、実はそこを神崎に分析して欲しいんや」

真田は神崎の肩を軽く叩いた。

「ちょっと休憩しよか」

真田はそう言うところクリーンルームの出口に向かって歩き出した。

クリーンルームを出ると更衣室で全員クリーンウェアを脱いだ。

相川はクリーンウェアを脱ぐと大きく深呼吸をした。スタイル抜群の彼女の胸がさらに大きくなった。

「ふう、生き返った」

「お嬢は初めてのクリーンルームやさかい、疲れたやろう」

「ほんま疲れるわ・・・あ、じゃなかった、ほんと疲れました」

「ハハハ、まあ、そのうち慣れるわ、お嬢、胸大きくなったな」

「えっ？」

相川は両手をクロスして自分の胸を隠した。

「真田さん、レッドカード1枚、退場や」

「ハハハ、イエローカード1枚にしといてくれるか、退場は無理やな」

「じゃあ、大サービスでエロカード1枚にしてあげるわ、3枚で退場やしな」

相川は笑いながら真田に関西人のノリで冗談を返した。

神崎と村上がクスッと笑った。

「あっ、神崎さんと村上さんまで何笑ってるんですか？」
「真理ちゃん、関西弁、上手過ぎる、可笑しくて」

神崎と村上はちょっと横を向いて笑いをこらえた。

更衣室を出た神崎たちは来客室へと戻った。

来客室に入ると北堀が冷えた麦茶を用意してくれた。

相川は麦茶を一気に飲むと「ふうー」と息を吐いた。

「相川さんはかなり喉が乾いていたんですね」

北堀は相川を見て微笑んだ。そして、相川のグラスにまた麦茶を注いだ。

「あっ、北堀さん、すみません、ありがとうございます」

相川は照れくさそうにグラスを傾けた。

神崎はクリンノートを開くとプロセス要素のパラメーターを工程ごとにチェックしていた。

「神崎さん、社長が来社しますのでもう少しお待ちください」
「えっ！ 御社の社長様が来られるんですか？」

「今、大阪の本社から移動中なんです、もうすぐ到着します」
「わざわざ？」

「ええ、神崎さんに会いに来られます」

「えっ！ そうなんですか！」

神崎は驚いてノートから目を離した。

「社長が来ましたらお呼び致しますので、ゆっくり休憩して下さい」

そう言うのと北堀は一礼して来客室から出ていった。

相川はグラスの麦茶を半分位飲み乾すと壁の時計を見た。

「あれっ、もうこんな時間なんだ、17時前だわ！」

そう言うのと席を立て窓の外を眺めた。窓の外は日が傾いて夕日が西の山に隠れようとしていた。

「クリーンルームに入ると時間の感覚が狂うんだよ」

神崎も席を立て窓の外を眺めた。

「あれっ？ 流れ星！ ほら神崎さん！」

そう言うのと相川は西の空を指さした。

「えっ？ 流れ星？ そんなのこの時間に流れないよ飛行機じゃないの？」

「ほら！」

神崎が西の空を見ると確かにキラキラと光るものが飛んでいた。

「飛行機？ いや違うな？ かなり高度が高いぞ・・・あれは人工衛星だ！」

「人工衛星？」

「そう、稀に見えるんだよ、人工衛星が見られるなんてラッキーだな」

「そうなの？ 見えるんだ？ 人口衛星って？」

「ああ」

「あっ消えた！」

人工衛星はすぐに見えなくなった。

相川と神崎はしばらく外の景色を眺めた。

「いいですね、ここ、田舎で、空気が綺麗で、何かのんびりしてますよね、神崎さん」

「そうだな、都会じゃ見られない風景だな」

神崎と相川はしばらく裏山の風景を眺めた。

神崎が山の裾野に視線を移すと丸い大きな敷地が見えた。

敷地の直径は3kmほどもあり、周辺には高い壁があって中には入れない様だった。その高い壁にはCMDとロゴが入っていて、敷地の中は芝生になっている。

「あれっ、大きな敷地だな、工場を拡張するのかな」

「ほんとだ、凄く大きい敷地ですね、壁にCMDって書いてあるわ」
「CMD社ってすごい会社だな、ほんとに」

「そうですよね、うちの会社と偉い違いだわ」

神崎と相川はその風景に感嘆した。

第五章 世界システム

ドアをノックする音がして、北堀と真田が部屋に入ってきた。二人はC M D社のユニフォームから私服に着替えていた。

「神崎、社長が来たさかい打ち合わせ場所を変えるで、準備してくれるか」

「あつ、はい、準備します」

神崎と相川は鞆を持って部屋の外へ出た。

「神崎さんと相川さんは玄関にタクシーが用意してありますのでそれに乗って下さい」

「えっ？ 会議室じゃないんですか？ 北堀さん」

「ええ、近くの料亭に行きます」

神崎と相川が玄関に出ると運転手が出迎えた。運転手は高級車の後部ドアを空けて神崎と相川を乗せた。

「運転手さん、板橋町の鴨井までお願いします」

「はい、わかりました」

北堀は運転手に行き先を告げると真田と一緒に別の車に乗り込んだ。

神崎たちを乗せたタクシーは20分程走って隣町の料亭の前で止まった。真田たちの車もすぐに到着した。

「ほな入るか、神崎、社長がお待ちや」

神崎たちは鴨井と書かれた料亭の暖簾をくぐって中へ入った。

「神崎さん、これって接待ですよね」

「ああ、そうだね、社長さんの接待じゃあ断れないな」

「私、初めてです接待、緊張しますね」

「まあ、そうだね、これも社会勉強さ」

神崎は意外に接待には馴れていた。ただし、いつもは接待する方なので立場が反対だ。

店に入ると和服姿の女将さんが部屋まで案内してくれた。

靴を脱いで古い建屋の廊下を歩いて行くと渡り廊下があり小さな橋が架けてあった。

橋の下には小川が流れていて綺麗な錦鯉が泳いでいる。

年季の入った古い建物の中は改装されて意外に洒落た作りになっていた。

「こちらのお部屋です」

客間に着くと部屋の前で女将が右手を差し出した。

「おやっさん、失礼します」

「おお、真田、来たか、まあ入りや」

真田は社長に挨拶をすると部屋の中へ入った

「おお、神崎も、お嬢も、北堀も、入れ、入れ」

真田が部屋の外で待っていた3人を呼んだ。

「失礼します」

神崎たちも部屋の中に入った。

座敷に入るとCMD社の社長が上座で腕を組んで座っていた。白髪混じりの頭だが顔には精気があり体格はがっしりとしていた。

年齢は50代前半位だろうか大企業の社長としてはかなり若い方だろう。

「社長、彼が神崎君で、横のベッピンさんは神崎の部下の相川さんですわ」

「新光技術工業社の神崎です、よろしくお願い致します」

「相川です、よろしくお願い致します」

「社長の水野勝利です、よろしくお願い致します」

神崎と相川が挨拶をすると社長は立ち上がって丁寧に挨拶をした。

「社長！」

「んっ？」

社長が真田の方を向くと真田は社長の耳元で何かを囁いた。社長は少し顔を傾けて真田の話を聞いていた。

「えっ、ほんまか？」

「ええ、ほんまです」

社長は少し驚いた顔で相川の顔を見た。

「えっ？ 何？」

相川は少し顔を傾げた。

「ああ、まあ、みんな座ってくれ」

「神崎さんと相川さん、今日は私の奢りや、遠慮なくやってや、接待やないさかいな」

「えっ？」

「まあ、有志の席や言うこっちゃ、君の会社も基本的に接待は禁止されとるやろう」

「ええ、まあそうです」

「と、言うことで、真田、北堀、ビールの栓抜いてくれ、乾杯しよるか」

「はい、社長」

真田が乾杯の音頭を取ると宴会が始まった。

社長は意外に気さくな人で話の多くは趣味の話や若き日のサラリーマン時代の話だった。時折、夜の武勇伝を語ったりして冗談でみんなを笑わせた。また、神崎たちの仕事の

の激励もしてくれた。

「神崎さん、僕はね、仕事をする前に人ありきやと思うんや、物を作る前に人を作らんな」

「はい、松下幸之助さんの教えですね」

「おつ、若いのによく知ってんな、自分なかなか偉いな」

「いえ、うちの社長も松下幸之助さんの話をよくしますので自然に覚えてます」

「ハハハ、そうか、あんたとこの社長も偉いな、ええ社員を持って

はるわ」

「いえ、とんでもない、恐縮です」

「実は今回の仕事の協業候補は大企業で何社もあったんや」

「えっ？」

「けど、真田が新光技術工業社を推薦したさかいに君とこに決まったんや」

「そうだったんですか」

「正直、うちの真田は天才的技術者やと僕は勝手に思っているんやけどな」

「ええ、その通りですね」

「その真田が天才と呼ぶ神崎という男に一度会って見たかったんや」
「えっ？」

神崎は水野社長の顔を見上げた。

「今回の事業開発はうちも社運をかけているんや、特にブラックウエハの製造工法確立が成否の鍵やな、もし失敗したらうちの会社は間違いなく倒産やで、これはハイリスク

ハイリターンの大博打や、しかし、残念やけど、この製造工法を確立出来る技術者はうちの会社にはおらんね、この天才真田でも四苦八苦してるんや、神崎さん頼むで力を貸

してや」

社長の水野が神崎に頭を深く下げた。

「水野社長、頭を上げて下さい。力を貸すなんてとんでもありません、弊社もかなりの技術指導を頂かないと製造工法の確立は無理です。今日、御社のウエハ製造工程を見せ

て頂いて強く実感しました。C M D社のウエハ製造工程は最先端装置ばかりです。これの技術確立が出来るかどうかは私も正直なところ自信がありません」

神崎は水野社長より深く頭を下げると正直な気持ちを伝えた。

「ハハハ、真田君、この男なかなか正直やな、気に入ったわ」

「そうでしょう、社長、でもこの男はやりますよ、きっと」

「真田先輩、勘弁してくださいよ」

「まあ、そう言わんと頑張ってくれるか、それにもう契約は決まったんやし、やるしかないで」

「ええ、まあ、それはそうなんですが」

神崎は少し頭をかきながら困った顔をした。

「それとなあ、これから御社との共同開発を始める前に言うとかなあかんことがあるんや」

「はい、何でしょう」

「これから話すことは弊社情報セキュリティA A Aの企業秘密やさかい内密に頼むで」

水野社長はそう言うのと神崎と相川の顔を見た。

「偶然やけど相川さんにも関係あるんや」

「えっ？ 私も」

相川は人差し指を自分の顔に向けた。

「この前、真田が御社に契約執行に行った時、ウエハの設計に関す

る質問があつたやろう」

「ええ、弊社の島開発本部長が質問しました」

「実はブラックウエハの基本設計はC M D社ではやってないんや」

「何ですって？　じゃあ設計はどこがしたんですか？」

「ある天才科学者が個人で設計したんや」

「ある天才科学者……？　まさか？」

神崎が相川の顔を見た。

「えっ？　何よ、神崎さん、急に？」

「君のお父さんじゃないのか？」

「えっ？　私の父？」

「実はそうなんや、このブラックウエハは相川教授が設計したもんなんや」

「えっ！　それじゃあ、新和開発社のブラックウエハと同じものなんでしょうか？」

「いや、それは違う、新和開発社のブラックウエハとは構造が全く異なるんや」

真田が横から話に加わった。

「実はこのブラックウエハは俺が大学を卒業する時に相川教授からもらったんや」

「ええっ？」

「”お前に宿題をやるよ”と言ってこのブラックウエハを渡されたんや」

「相川教授は何故ブラックウエハを真田先輩に預けたんですか？」

「そこや、神崎、相川教授は壮大な研究目標を持っていたんや」

「あれですか？　ニコラテスラの世界システムですか？　冗談だと思っただけだよね」

※ニコラ・テスラとはエジソンと並んで20世紀を代表する偉大な天才発明家。回転磁界を考案し交流送電の基礎を築いた。交流モーター、蛍光灯、テスラコイル等発明多数

。

※世界システムとはテスラが考えた電力無線送電システムのこと。コロラドスプリングス研究所での実験はあまりにも有名。

「それや、世界システムや、つまり電力の無線送電システムや」

「でも、相川教授は私が大学を卒業する頃にはスーパーコンピューターの研究をされていましたよ」

「それは当時、大学に国と企業からの共同プロジェクト開発の依頼があったさかいや」

「そうなんですか」

「ああ、相川教授は個人的に3つの研究を同時にしてはったんや」「3つの研究？」

神崎が真田に尋ねた。

「まあ、スーパーコンピューターを入れると4つの研究やけどな、その内容は、マイクロ波による電力の無線送信システム、電力の無線受信システム、強誘電体による蓄電シ

ステム、そしてスーパーコンピューターや、相川教授はブラックウエハの技術を組合せて宇宙で発電した電力をマイクロ波で地球に効率良く送ろうと考えてたんや、そやけど

多忙な人やったさかい全部の研究を同時にやるのは無理や、それで俺が強誘電体による蓄電システムの研究を任されたと言うわけやね」

神崎は真田の話を聞いて目が点になった。

「神崎さん、宇宙からのマイクロ波電力送受電システムはC M D社がすでに完成して実用化実験に入ってるんや、そしてスーパーコンピュータは新和開発社がほぼ完成させて

、残るはこの蓄電システムだけや、これが完成すると人類は宇宙から無限のエネルギーを手に入れることになるんや、夢の様な話やろう」

「ええ、まるでS F小説みたいな話ですね！」

神崎は真田と水野社長の話を聞いて深く感動していた。

「相川さん、あんたのお父さんが亡くなったのは大変残念やったな、ほんまに惜しい人や、生きてはったら今世紀最大の科学者やったと思うわ」

水野社長が相川の顔を見た。

「水野社長は私の父とどういう関係だったんですか？」

相川真理が水野社長に問いかけた。

「相川真一は大学時代のライバルや、まあ、ライバル言うても仲は良かったけどな」

「えっ？ そうなんだ？」

「ああ、彼は大学院に進んで教授になったんやけど、僕は親が社長やったさかい跡継ぎで就職したんや、ほんまは僕も大学教授になっ

て色々と研究したかったんやけどな、そ

れは出来なかったんや、相川君が羨ましかったわ、そやけど大学卒業してから君のお父さんとは親交があってね、彼の研究の事業化で常に協力関係にあったんや」

「父がいつもお世話になってたんですね、ありがとうございます」

相川は水野社長に頭を下げた。

「いや、いや、お世話になったんはうちの方や、君のお父さんの研究のおかげでどれだけの利益を得たことか計り知れんわ、うちの会社にとってもあんたのお父さんは恩人や

し、礼を言わなあかんのはこっちや」

そう言うとき水野社長は相川に頭を下げた。

「まあ、相川さん、神崎さん、これは縁やな、お互いがんばって相川教授の夢やったこの事業を完成させよか」

「はい、喜んで」

水野社長は神崎と相川の手を取って握手を交わした。

第六章 新プロセス

翌日、神崎たちは出張先から新幹線で会社に戻ってきた。

神崎は半導体製造工法開発チームと書かれたドアを開けて職場へ入った。

半導体製造工法開発チームは技術事務所内に新設されたばかりだ。神崎の机は窓側の管理職エリアにあり、隣には解析技術課の中村課長が肩を並べている。

「おお、神崎、出張お疲れ様だったな、どうだったCMD社は」

中村課長が神崎に声をかけた。

「ああ、中村課長、いやあ、CMD社の半導体工場は凄かったですよ、壮大なスケールでした」

「そうか、また、後で話をゆっくり聞かせてくれ、頼むよ」

「はい」

中村課長はそう言うのと神崎の肩をポンと叩いた。

神崎は机の横に鞆を置くと席に着いた。

「ふう、疲れた」

神崎は椅子に座るとパソコンのスイッチを入れた。

「神崎チームリーダーお疲れ様です」

石川が神崎に声をかけた。

「ああ、石川君」

「どうでしたか、C M D社への初出張は」

「いやあ、大変だったよ、凄い規模の工場だね」

「そうですか、私も見たかったですよ」

「いや、これから君も嫌と言うほど出張してもらうことになるよ」

「神崎さん、全然OKですよ、暇でしたから」

「石川君、早速なんだけど工法開発のマスタープランを作成しなければならぬんだ」

「OKです、何でも指示して下さい」

「俺はこれから会議予定なんだけど、君はマスタープランの作成にとりかかってくれるかい」

「はい」

「マスタープラン作成に必要なデータは工法開発チームの技術サーバーに全て揃っているから、試行錯誤しながら草案を練り初めて欲しいんだ、ただし、このデータは全

て情報セキュリティA A A級だから取り扱いには注意してくれよ、作成した資料には厳秘表示を入れてメール転送する際は全て暗号化で送信してくれ」

「了解です」

石川は席に戻ると早速作業を始めた。

「ああ、真理ちゃん」

「はい」

神崎は相川を呼んだ。

「出張帰りで早々で申し訳ないんだけど、15時から出張報告会議だから準備してくれるかい」

「はい、了解です」

神崎は早速指示を出した。

神崎はパソコンが立ち上がるとすぐにメールのチェックを始めた。

「うわあ、200通も来てる」

神崎は出張中に溜まったメールを見てため息をついた。

「こりゃ、たいへんだ、こんなの毎日処理するのか俺、管理職って大変だなあ」

神崎はモニターを見ながら少しぼやいた。

「大変でしょう？」

「ああ、大変、大変、・・・えっ？」

神崎がモニターから目を離して前を見ると、田町が資料をかかえて前の席に座った。

「あれ？ 田町？ 何してんの？ お前の席は隣のエリアだろう」

「えへへ、今日からここっスよ」

「うそお、聞いてないけど」

「いいの、いいの、社長了解済みだから」

「マジで？」

「マジ、マジ、マジっスよ」

田町は神崎の方を向くとニコっと笑った。

「中村課長、いいんですか？」

神崎は中村課長に問いかけた。

「ハハハ、神崎、田町は治外法権さ」

「ええっ？」

「俺の手には負えないよ、社長指示が出てるんだ、神崎のサポートをよろしく頼むってな、まあ技術管理全体の業務を彼女は兼ねるから問題無いよ」

「そんな・・・」

「と、言うことでね！ 神崎チームリーダー！」

田町は指でVサインを作ると小さく手を振った。

「はぁゝ恐るべし田町姉妹・・・」

神崎は小声で小さくぼやいた。

「ん？ 姉？」

「いや、何でもないよ、たまちゃん、ハハハ・・・がんばってね」

神崎は笑ってごまかした。

「あつ、そうだ！ こら、お嬢！ あんた内緒で神崎さんと二人で出張に行ったわね！」

「ええっ？ 仕事ですよ田町先輩！」

「ダメ！ 行くときは事前にちゃんと報告しなさい！ 今度から私

も行くからね!」

田町はそう言うのと神崎の方を向いた。

「あっちゃー」

「あつ、あつ、あっちゃーって何んっスか」

「いえ、分かりました、田町様」

神崎は左手を上げると田町に敬礼した。

「よろしい」

田町が満足そうに言葉を返した。

石川が横の席でクスクスと笑った。

3ヶ月後

神崎は新光技術工業社の評価室の中で石川とブラックウエハの解析をしていた。

「石川君、どうだい調子は」

「いやあ〜どうもうまく行かないんですよ、カーボンナノチューブの一部がうまく形成されません」

石川はTEMの画面を見ながらぼやいていた。

※TEMとは断面透過電子顕微鏡のこと

「神崎さん、これ見て下さい、この部分なんです」

石川はそう言うのとTEMの観察倍率をさらに上げて不具合のある部分を拡大した。

「ああ、この部分だね、カーボンナノチューブの一部が切れちゃってるね」

神崎は装置のモニターに顔を近づけると不具合のある部分を指さした。

「ええ、そうなんです、設計上はこの部分をカタツムリみたいな形にしないといけないんですけど、今のプロセスじゃあ何回トライしても無理ですね」

「カタツムリかあ・・・え？　カタツムリ？　・・・もしかしてネジの先端部分みたいな形？」

「そうですね、ネジの先端部分みたいな形です」

神崎はハッとしてあの事件のことを思い出した。

そうだ、これはあの時と同じだ、ネジの形に似ているし、あのやりかたの応用で出来るかも知れない。

神崎は顎に手をやると頭の中で工法のイメージを描いた。

「よし、出来た、試作してみよう、これはたぶん行けるぞ」

「えっ？　出来たって？　何がですか？」

「工法だよ」

「マジですか、神崎さん」

「ああ、マジだ、たぶん、一発形成で出来ると思うよ」

石川が驚いて両手を上げた。

「よし、石川君、技術事務所で作戦を練ろう」

神崎はそう言うのと石川の肩をポンと叩いてクリーンルームの出口に向かった。

神崎は事務所に戻ると自分の机の固定電話でC M D社の真田に電話をかけた。

「はい、C M D社です」

北堀が電話に出た。

「ああ、北堀さん、新光の神崎ですが、真田さんはいらっしやいますか」

「あつ、神崎さん、いますよ、ちょっとお待ち下さいね」

北堀が真田に電話を転送した。

「あつ、真田さん、お世話になります、新光の神崎です」

「ああ、神崎か」

「真田さん、お願いがあるんですけど」

「おお、何や」

「評価用で製造装置を一台作りたいんです」

「何のや」

「C V Dです」

「それやったらうちの製造装置を使ってもいいぞ」

「いえ、ちょっと、特殊な実験をしたいんで、改造が必要になります」

「そうか、それやったら、中古でええか」

「ええ、中古でいいですけど、遊休設備とかないですか」

「ああ、たぶん、あると思うけどな、ちょっと待てよ、調べたるわ」

真田は北堀に設備の在庫を調べさせた。

「神崎OKや2台あるわ、好きな様に改造してええぞ、改造仕様をいうてくれたら、うちで発注したるけどな」

「改造仕様はまた後で考えますが、2千万円程度の研究費用を使つてよろしいでしょうか」

「ああ、全然OKや、なんぼでも使え、安いもんや」

「ありがとうございます」

「神崎、何かええアイデアが出たんか？」

「ええ、ウルトラCの必殺技です、プラズマCVD工程の問題を一気に解決出来そうです」

「おお！　どんなんや！」

「3種類の混合ガスと超指向性の回転磁界を利用したナノチューブ膜の形成方法を考えたんです」

「おお、凄いやないか、混合ガスを磁化させながらナノチューブ膜を成長させる訳やな」

「ええ、その工法でカーボンナノコイルを一発形成しようと思ひます」

「やっぱり、お前は天才やな、凄いわ、ほんまに」

「真田さん、それじゃあ、改造仕様が決まったら、また連絡します」

「おお、期待してるで、がんばりや！」

神崎は電話を切ると製造工法開発チームの全メンバーを集めた。

「みんな、第1技術会議室に集合して下さい！」

神崎は席を立って工法開発メンバー全員に指示を出した。

半導体製造工法開発チームは、現在、神崎を含めて5名になっていた。プロセス開発担当は石川智樹、解析データ管理担当は相川真理、評価進行管理担当は田町由香里、

そして新たに設備設計開発担当として新規設備開発技術課から深淵進がチームに加わっていた。

深淵は島開発本部長が推薦した人物で生産技術のスペシャリストだった。他のメンバーは全員20代だが深淵は35歳だ。深淵は社長がベンチャー企業を立ち上げた時に島

開発本部長と共に第一線で活躍した凄腕エンジニアだった。本来であれば部長職についてもおかしくない程の人物だが、彼は設備を作るのが好きで、あえて出世せずに技師と

いう立場で仕事をしていた。

その豊富な実務経験とエキセントリックな人柄を神崎は気に入っていた。

「それじゃあ、会議を始めよう、今日の議題はプラズマCVD工程の改善だ、田町、資料を映してくれ」

神崎は田町に会議資料の表示を指示した。

「はい、了解っス」

田町は会議資料をプロジェクターでスクリーンに表示させた。

「石川君、説明をお願いするよ」
「はい」

石川はレーザーポインターを手に持つと説明を始めた。

「現在、プラズマCVD工程の歩留は良品率が3%です、また、良品率は3%ですが完全良品ではありませんので、実質は歩留0%です。その原因はこの部分のカーボンナノ

チューブがうまく形成されないからです。この部分のプロセス条件を何度も見直しましたが、現在の工法では完全良品を作るのは実現不可能と考えます」

石川は説明を一通り終わると席についた。

「今日はこの部分についての工法改善案を私の方から説明します」

神崎は電子黒板を会議室の中央に持ってくると設備の機構図を手書きで描き始めた。

そして約5分で設備の詳細機構図とプロセス条件を黒板に書き終えた。

「設備はこんな機構になります。この工法は3種類の混合ガスを磁化させながらナノチューブ膜を成長させてカーボンナノコイルを作ります。プロセス条件は・・・etc」

メンバーは全員がポカンと口を空けて神崎を見ていた。

「凄いなあ、神崎さん、これ、いつの間に考えたんですか」

「いや、つい先程、思いついたんだ」
「はあ？」

石川は電子黒板を眺めながら感嘆した。

「神崎さん、この設備の完成希望納期はどれ位ですか？」
「そうですね、1ヶ月位で何とかならないですかね？」
「えっ！ 1ヶ月？ きびしいなあ！」

深淵は立ち上がると電子黒板の前で腕を組んだ。

「深淵さん、何とかできますか？」
「うーん、よし！ 何とかしましょう！」

深淵は両手で顔の頬をパンッと叩くと気合を入れた。

第七章 電磁バリア

1ヶ月後

CMD社のクリーンルームに神崎が考えた試作評価用の特別なCVD装置が搬入された。

その装置はCMD社の設備開発チームが使用する特別なエリアの片隅に設置された。

真田と村上と北堀は装置の設置作業の立会いをしていた。

「なんじゃあ、これ？」

真田がその装置を見て呟いた。

装置に保護カバー等は無く、CVDのチャンバー（反応器）が剥き出しになっていて、ステンレス製のチャンバーからは何本もの電子銃がフグの針の様に出ていた。

「これ、お茶の水博士が作ったんか？ フグみたいな形しとんな、もうちょっとデザイン何とかならんのかいな？」

※お茶の水博士は手塚治虫氏の漫画、鉄腕アトムに出てくる博士のこと。

「ほんとうですね、昭和の匂いがする装置デザインですね、古いSF小説の挿絵に出てきそうですよ」

「神崎とこの評価装置は結構性能がええんやけどな、デザインがな

あ……センスないわ、ほんまに」

真田がそう言うのと北堀が横を向いてクスクスと笑った。

ほんとうにセンスのない装置デザインだった。

翌日、半導体製造工法開発チームメンバーは全員が出張してC M D社のクリーンルームに入った。

C V D装置の周辺には計測機器がずらりと並べられてガス配管や複雑な電気配線があっちこちに引き回してあり、C M D社の生産技術担当者が忙しそうにその接続確認を

行っていた。

「ガス配管よし！ 電気配線よし！」

深淵はC V D装置の原動配管を指差呼称すると設備の周辺機器の配線をチェックした。

「神崎さん、設備原動のチェックが完了しました」

深淵は神崎に設備の立上準備O Kサインを出した。

「よし、じゃあ実験を始めますよ、真田さん」
「了解や」

神崎は深淵に実験スタートの合図を出した。

深淵は周辺機器のスイッチを次々にセットして最後にC V D装置

のメインブレーカーをONした。CVD装置は小さな唸り音を上げて動き始めた。

「石川君、サンプルウエハを手動モードでチャンバーにセットしてくれ、実験スタートだ」

「はい、了解です！」

石川はチャンバーを手動モードでオープンするとサンプルウエハを1枚だけセットして装置のスイッチを入れた。

チャンバー内の空気が真空ポンプで抜かれて高真空状態になると石川は手動モードでガスの置換作業を始めた。計測機器メーターの針がゆっくりと振れ始めてガスの濃度調

整が自動的に行われた。

「よし！ ガス濃度OK、超指向性回転磁界モードスイッチON、プラズマ照射スイッチON」

石川がプラズマ照射のスイッチをONすると計測機器メーターの針が一瞬だけ激しく振れたが、しばらくすると一定の範囲で安定して振れる状態になった。

「試作CVD装置は正常稼動しました、カーボンナイトライド膜成長スタートします」

「よし、成功だな、膜が出来上がるまで約15分だ」

神崎は石川の肩をポンと叩くと、ポケットからストップウォッチを取り出してスタートボタンを押した。

「神崎、ひとつだけ分からんのやけど、超指向性回転磁界って何や？」

「ああ、これは、マイクロニードルを無数に並べて局部的に回転磁界を作るんですよ、相川教授が考えて命名したんです。ウエハのチャックテーブルの中にマイクロニードル

を仕込みました。超指向性回転磁界の影響でガスが部分的に渦を巻くんです、そうするとその部分の膜だけがネジの様な形で形成されるんですよ」

「ほんまかいな、そんなん出来るんか」

「ええ、実は新和開発社のブラックウエハで実現されていたんです」

「凄い技術やな、相川教授が特許とってるんか」

「いえ、特許は相川教授も新和開発社も出願していませんでした、完全なブラックボックス技術です」

「そうなんや・・・」

真田は神崎の話を聞いて感嘆した。

「ねえ、ねえ、お嬢、この機械へんな形してるわね、ハリセンボン見たいね」

「ふふふ、そうですね、田町先輩」

相川がクスッと笑った。

田町は装置の裏側を覗いた。

「あれっ、何か外れてるっスね？」

田町は外れたケーブルを手につくと深淵に見せた。

「あっ！ 高压ケーブルが抜けてる！ それ！ 触っちゃダメだよ

！ 田町さん！」

「えっ！」

田町はあわててケーブルを手から離れた。ケーブルが床を転がって先端がCVD装置の本体に触れた。

バシツと音がしてCVD装置が止まった。

「あっちゃー！ 何かやっちゃったっスか？」

「しまった！ ウエハ観察用電子顕微鏡の高圧線が装置に接触したみたいだ！」

CVD装置が非常停止したので深淵はあわてて装置の点検を始めた。

「何やってんだよ！ 田町！」

神崎が田町を怒った。

「神崎さん、すみせんっス」

田町が神崎に泣きそうな顔で謝った。

ブウワーン

その時、装置から妙な唸り音が聞こえ始めた。

「何だ？ この音は？ 装置の電源は切れてるはずだぞ！」

深淵が周りを見渡した。

「何だか変だな、視界が少し歪んでいる様な気がするんだけど」
「ほんまや、確かに視界が歪んでるわ、何やこれ」

神崎がそう言うと言真田も周りを見渡した。
実験の立会いメンバーたちも異常に気付いて騒ぎだした。

「どうされました？」

隣のエリアで別の機械の調整作業をしていたCMD社の生産技術
作業員が異常な状況に気付いて声をかけた。

作業員は金属製の調整工具を持ってこちらに近づいて来た。

バシツと音がして作業員の持っていた金属製の調整工具が吹っ飛
んだ。作業員は驚ろいて後ずさりした。

「近づかないで下さい」

神崎が大きな声で作業員に注意した。

神崎と真田は顔を向き合せた。

「電磁バリアだ！」

「電磁バリアや！」

二人は同時に叫んだ。

「神崎さん、真田さんこれを見て下さい」

神崎と真田が振り返ると深淵がCVD装置のガスを手動排気してチャンバーの蓋を開けていた。

「うわっ光ってる！」

神崎がチャンバーの中を覗き込むとブラックウエハが青白く光っていた。

「装置に漏電した超高電圧を蓄電した様です」

「超高電圧って何ボルトですか？」

「300万ボルトです」

「えっ！ 300万ボルト！」

神崎は驚いて深淵の顔を見た。

「床のグラウンドラインが吹っ飛んでいますから我々も300万ボルトに帯電していますよ」

「何だって！ 大変だ！ みなさん絶対に動かないで下さい！」

神崎は大声でメンバー全員に注意した。

「真田さん、どうしましょう、このエリアから出られなくなりました」

「300万ボルトの高電圧でグラウンドラインが吹っ飛んでフローティングしたさかい逆に助かったんやな」

「ええ、近くに別のグラウンドラインがあつたら放電してみんな即死だったと思いますよ」

「そやな、ブラックウエハはもの凄い容量を持ってるさかいな、放電させたら大変なことになるで」

真田は顎に手をやるとしばらく考えこんだ。

「よし、静電気拡散材でトンネルを作ろう、その中を通り抜けてこのエリアから脱出するんや」

「賛成です、スロリーークですね、えーと抵抗率は・・・たぶん10ギガオーム位は必要ですね」

「おーい、田中、大丈夫か」

真田は隣のエリアで腰を抜かしている生産技術作業員に声をかけた。

「真田さん、大丈夫です、右手がちょっと痺れてますけどね、これは何なんですか？」

「ブラックウエハが300万ボルトの高電圧で蓄電されて電磁バリアが発生したんや」

「どうしたらいいんですか」

「俺たちは今300万ボルトに帯電してるさかい、電圧をスロリーークさせたいんや、隣の棟の組立工程に行って床の静電気拡散性フロアタイルを全部はがして持って来てく

れ、それでトンネルを作って欲しいんや、それと送風式のイオナイザーを全部はがしてトンネルの中にイオン風を通してくれるか、緊急事態やさかい応援を呼んでくれ、それ

と電磁バリア内には絶対入るなよ、さっき調整工具が吹っ飛んだ位置より中へ入ったらあかんぞ」

「わかりました応援を呼んで来ます」

生産技術作業員は部屋から出ると応援を呼びに行った。

1時間後

CMD社の生産技術作業員たちは静電気拡散性フロアタイルで簡易式の静電気拡散トンネルを組立てた。

静電気拡散トンネルはゆっくりと電磁バリア内に挿入され、イオナイザーのイオン風がトンネル内に送風された。

「みんな、慌てないで、ゆっくりとトンネルを通過して電磁バリアの外へ出て下さい！」

神崎と真田が全員を誘導した。

そして最後に神崎と真田が静電気拡散トンネルに入った。

「ふう〜助かった、どうなるかと思った！」

神崎はトンネルを抜けると深呼吸をして後ろを振り返った。

「真田さん、ブラックウエハはとんでもない性能を持っていますね、まだ未知の部分があるんじゃないですか」

「ああ、俺もこんな副作用があるとは夢にも思わへんかったわ、まさか電磁バリアが出来るとはな」

真田と神崎はCVD装置を見つめた。

それから2時間後

CVDのチャンバー内で青白く光っていたブラックウエハはその輝きを失って全エネルギーを放出した。

「神崎、今日の実験はこれで中止にしようか、俺もさすがに疲れた

わ」

「はい、そうですね、膜の成長実験はまた明日にしましょう、お疲れ様でした」

「神崎、来客室でゆっくり休憩してくれ、俺もちょっと片付けたら行くわ」

「はい」

「ああ、北堀、新光のメンバーにお茶入れたってくれ」

「・・・」

「おい、北堀、聞いてるか？」

「はーい、わかりました」

C V D装置の裏側で北堀の声がした。

「みんな、助かったわ、ご苦労さん、フロアタイルとイオナナイザーを元の場所に戻してくれるか、すまん」

真田はC M D社の生産技術作業員に礼を言いながら現場の片付けを指示した。

「ああ、神崎、必要工具とか実験材料はそのまま置いてくれてかまへんで、実験はまた明日やるさかいな」

「はい、真田さん、それじゃあ、お言葉に甘えまして、先に退出させて頂きます」

神崎はメンバーをクリーンルームから先に追い出すと後ろを振り向いて真田に頭を下げた。その時、後方のC V D装置の裏から出てくる北堀の姿が見えた。

彼女は何かの資料ホルダーとウエハケースを両手にかかえていた。

「北堀さん、手伝いましょうか」

神崎が北堀に声をかけると北堀は急にギョツとした顔で神崎の顔を見た。

「い、いいえ、結構です、先に出て下さい、神崎さん、後で行きますから」

「そうですか、それじゃ、お先に」

神崎は一瞬、変だなと思ったが、あまり気にせず、北堀に頭を下げてクリーンルームを退出した。

「田町先輩、今日は災難でしたね」

「ええ、本当だわ、実験の失敗は私の責任ね」

「田町先輩の責任じゃあないですよ、だって、ケーブルが外れていたのが悪いんですよ」

「お嬢はやさしいわね」

田町は化粧室の鏡で相川を見ると微笑んだ。

2人は化粧室で髪を直すとドアを開けて来客室に向かった。通路を歩いてしばらくするとクリーンルームの更衣室から北堀が出てくるのが見えた

第八章 宇宙エネルギー

北堀はクリンタイプに分厚い資料ホルダーとウエハケースを両手に抱えていた。

「あっ、北堀さん、荷物持ちますよ」

「私も手伝います」

田町と相川が北堀に手を差し出した。

「結構よ」

北堀は愛想無く返事をする。2人の顔を少し睨んで通り過ぎた。

「やっぱり手伝ってもらおうかしら？」

北堀が突然振り返った。

「念の為に人質にしましょう」

「・・・？」

相川と田町は北堀が何を言っているのか意味が分からないので顔を見合わせた。その時、相川と田町の背中に何かが当たった。

2人が振り向くと生産技術作業員の男たちが拳銃を突きつけていた。

「ひっ、何これ？」

田町が小さく声を上げた。

「さあ、行くわよ！」

北堀が生産技術作業員の男たちに指示を出した。

「ああ、疲れたなあ」

石川は事務棟にある2階の来客室に入ると倒れ込む様にソファに座り込んだ。その後から深淵も石川の後を追う様にソファに座り込んだ。

「しかし、神崎さんと真田さんは、やっぱり天才だなあ！」

「ええ、そうですね深淵さん、あの状態からの脱出は奇跡ですね」

「ああ、奇跡だよ、本当に！」

来客室のドアが開いて神崎が入って来た。

「お疲れ、あれ？ 田町と真理ちゃんは？」

「トイレに行きましたよ」

「ああ、そうなの」

来客室のドアがまた開いて真田が入って来た。

「あれっ、北堀がおらへんな、何しとるんやあいつ、お茶の用意もせんと」

「北堀さんは、何かの書類とウエハーケースを持って忙しそうにしましたよ」

「ええ？ そうか？ 何やろうな？ ああ、それより、みなさん御

苦労さんやったね」

「いえ、真田さんもお疲れ様でした」

新光のメンバーはソファから立ち上がると真田に頭を下げた。

神崎は窓の外を見ると大きな伸びをした。窓の外は日が傾いて夕日が西の山に近づいていた。

神崎が山の裾野を見ると迷彩色の双発ヘリコプターが飛んでいた。

「あれっ、真田さん、この近くに自衛隊の基地でもあるんですか？」

「え？ 自衛隊の基地？ そんなあらへんで」

「でも、ほら、ヘリコプターが山の裾野に着陸しそうですよ」

「ええ？」

真田が窓の外を見た。

「あっ！ 着陸する気か？」

「そうみたいです」

「神崎、今、何時や？」

「えっ？ えっと16時45分です」

神崎は来客室の壁時計で時間を確認した。

「あかん！ この時間は絶対あかんのや！」

真田はえらく焦っていた。

「あっ？ あれ？ 田町、真理ちゃん、それに北堀さん？」

「えっ？ 何処や？」

会社敷地内にある駐車場の中に神崎は3人の姿を見つけた。

「あっ、社用のワゴン車に乗り込むみたいだ、何か田町と真理ちゃんに嫌そうにしてるな？」

「えっ？ 何やて？」

「あっ、後ろのやつが、ピストル見たいもので2人を脅してる」

「あっ！ ほんまや！ 何やあいつら！」

石川と深淵も立って窓の外を見た。

「あっ！ 俺の資料！ 北堀さんが手に持ってる技術資料フォルダはCVD装置の設計資料だ！」

深淵が叫んだ。

真田はPHSをポケットから取り出すと急いで北堀に電話をかけた。

北堀がPHSを取り出して電話に出るのが窓から見えた。

「おい、北堀、おまえ何処に行く気や」

「あら、見つかったわ」

北堀は真田の方を見た。

「フライトの時間なのよ、ちょっとドライブに行くわ！」

「何やと！」

「一発、あそこに撃って！」

北堀が作業員に命令した。

作業員は2階の来客室に向かって銃を発射した。ビシッと音がして来客室の窓に丸い穴が開いた。

「うわっ本物だ！」

北堀たちは車に乗り込むと裏口の非常門に向かって車を走らせた。

「追いかけましょう、真田さん！」

神崎と真田は事務棟から飛び出すと別の社用車に飛び乗った。

非常門の前に着くとセキュリティのキーロックが銃で壊され門が開いていた。

真田はアクセルを踏んでで非常門を走り抜けた。

非常門を抜けるとCMD社の社用道路に入った。社用道路は山の裾野にあるCMD社の敷地につながっていた。

「真田さん、急いで！」

真田は社用車のATドライブモードを切るとマニュアルモードに切り替えてアクセル全開で走った。

CMD社の敷地に近づいてきた時、前方に社用ワゴン車が止まるのが見えた。

北堀たちは車から降りて敷地の入り口にあるセキュリティキーロックをまた銃で撃って壊すと中へ入っていった。

「畜生！ あの中へ入りやがった！」

真田と神崎は車を降りると敷地の入り口に駆け込んだ。

敷地の中に真田と神崎が入ると前方を歩く北堀たちの姿が見えた。相川と田町は技術資料フォルダーと実験サンプルを運ばされていた。向こう側には双発のヘリコプターが着陸している。ヘリコプターの周りには銃を肩に背負った軍服の男たちがずらりと並んでいた。

「待て！ 北堀！」

真田が叫んだ。

「あら？ 真田、もう来たの、せっかちねえ！」

北堀は後ろを振りかえった。その時、ヘリコプターのドアが開いて中から一人の男が出て来た。

その男は背広を着てサングラスをしていた。

「北堀、御苦労！」

その男が北堀を労った。

北堀は相川真理から技術資料フォルダーを奪うとその男に渡した。その男は資料の中を少しだけ確認して後ろにいる軍服の男に渡した。

「おまえ、何者だ！」

真田が叫んだ。

その男はサングラスを外して真田と神崎の方を見た。

「あ！ お前は金田じゃないか！」

神崎が叫んだ。

「そうとも俺は金田だ！」

「お前！ どうして生きているんだ！」

「俺は不死身だからな！」

「何だと！」

「アハハハ！ 冗談だよ！ 神崎！」

「お前は・・・いったい誰なんだ？」

「俺は金田の弟だ！」

「何だって！ やつの弟？」

「そうだ、お前に殺された金田智之の弟さ！」

神崎は一瞬戸惑った。

「おい金田！ CVD装置の設計資料なんてくれてやる！ その代わり田町と相川を返せ！」

「ああ、お前に言われなくても遠慮無く頂くさ、随分と待たされたからな！」

金田は不気味に笑うと神崎を睨みつけた。

「神崎さん逃げてこいつら危険だわ！」

相川真理が叫んだ。

「そうだ、欲しいものは手に入れた、もうお前らに用は無い！」

金田は手を上げると軍服の男たちに合図を出した。

軍服の男たちは銃を構えると真田と神崎に狙いをつけた。

「ん？ 何だ？」

その時、金田の足元で変な物音がした。

グワーンと音がして突然地面が揺れ始めると金田の前に巨大なアンテナが地面から突き出てきた。その凄い振動で金田と軍服の男たちはひっくり返った。

「真田さん！ 間もなくマイクロ波発電が始まります！ 早くここから出て下さい！ 危険です！」

「早く！ 早く！」

村上が敷地の入り口から叫んだ。

石川と深淵も後ろで叫んでいた。彼らも後から車で追いかけて来たのだ。

アンテナの先が急に発光して凄い稲妻があちらこちらに飛び始めた。

「うあっ！」

軍服の男たちの持っている銃が青白く光り始めると次々に暴発し

ていった。

「田町！ 真理ちゃん！ 今だ！ 逃げろ！」

神崎と真田が田町と相川の方へ駆け寄った。田町と相川は立ち上がると急いで神崎たちの方へ逃げて来た。

田町は慌てて神崎の前でこけてしまった。

ウエハーケースが割れて中のサンプルのブラックウエハが飛び出した。稲妻が瞬間にしてブラックウエハに飛んだ。

「田町！ 大丈夫か！」

「大丈夫っスよ！」

サンプルのブラックウエハはブーンと唸りを上げ始めた。そして周辺の空間が強力に歪始めた。

「電磁バリアだ！」

神崎たちは強力な電磁バリアに包まれた。

「村上！ 逃げろ！」

「でも真田さん！」

「心配するな！ 俺たちは電磁バリアの中にいるさかい大丈夫や！」
「わかりました！」

村上たちは急いで電磁シールド壁の外へ逃げた。

アンテナの発光が更に強くなった。宇宙空間では人口衛星の巨大

なマイクロ波送信アンテナが働き始めていた。

「ちっ！ くそっ！」

金田は舌打ちをするとヘリコプターへ急いで逃げ込んだ。北堀も慌ててヘリコプターに乗り込んだ。

ヘリコプターは火花を散らしながら離陸を始めた。その時、地面から凄い放電が走った。ズドーンと大きな音がしてヘリコプターは墜落した。

ギャーと中から悲鳴があがった。

「みんな目を閉じて地面に伏せろ！」

神崎が叫んだ。

アンテナからの放電は更にその威力を増し稲妻が敷地内全体を包み、敷地内全体が強力に発光して火の玉になった。

第九章 新エネルギー時代の幕開け

1分後

急に敷地内が静かになった。

神崎は静かに目を開くと周辺を見渡した。

「あっ！」

「どうした？」

「どうしたの？」

「どうなったっスか？」

真田も相川も田町もゆっくりと目を開けた。

「えっ！」

「ええっ？」

「ありあ！ 何にも無いっスね」

みんな驚いて周辺を見渡した。

そこには何も無かった。ただ、神崎たちの周辺だけ美しい芝生がそのまま残っていた。

「うそみたい」

相川がつぶやいた。

「発電用の強力なマイクロ波でみんな蒸発したんだ」

「ああ、そう見たいやな、見事に何にも無いな」

「真田さん、この場所が発電所であることを北堀さんは知らなかったんですね」

「ああ、発電所の所在と発電日はトップシークレットやったんや、それを知ってたんは俺と社長だけや」

「やっぱり、そうか」

「緊急事態やさかい、村上は社長に連絡してそれを知ったんやろう」
「あっ！ 人工衛星！」

相川が人工衛星を指差した。

夕焼けの西の空に美しく輝く人工衛星を4人は静かに眺めた。

「おい！ 神崎さん！ みんな！ 大丈夫ですか！？」

石川たちが敷地の中に入ってきた。

「ああ！ 石川君！ 大丈夫！ 全員無事だよ！」

「大丈夫よ！」

「大丈夫っスよ！」

みんな大きく手を振って答えた。

「おい！ 村上！ 静電気拡散トンネルを作ってくれ！」

「えー！ またですか？」

村上はそう言う困った顔をした。

「村上さん！ お願いしまーす！」

相川が村上に手を振った。

「はい、了解しました！」

村上はひとつ返事で左手を上げると相川真理に敬礼した。

「おまえなあゝ」

「アハハハ」

みんなが笑った。

それから3ヶ月後

この事件はまた迷宮入りして、結局、犯人たちのことは一切わからなかった。

CMD社はブラックウエハの製造工法を完成させて新規事業への参入をマスコミに発表した。

輝かしい21世紀の新エネルギー時代が幕を開けた。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7710y/>

シークレットナイトライド2 〈再編版〉

2011年11月23日00時46分発行